死にたい不死身君

超人類

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
死にたい不死身君

【Ｎコード】
Ｎ９４６９Ｗ

【作者名】
超人類

【あらすじ】
もし……死んでから元の世界に帰る為の条件が、全く違う場合のお話。

これは、「人生は矛盾しっぱなし」のｉｆストーリーのつもりです。

一応主人公はチートですが、使用すればする程ＢＡＤ　ＥＮＤ直行

まっしぐら仕様です。

内容は、シリアス３％　寒いギャグ９７％仕様で行ってみたいと思います。

簡単なご説明（前書き）

あくまで簡単な説明ですので、読んだ方が……いいのかな？

簡単なご説明

これは自分が、書いてるお粗末過ぎるお話、「人生は矛盾しっぱなし」のもしもの話しです。

●具体的な違い。

1．転生物

2．段々と主人公の思考回路が変態化する。

3．おもっくそ、原作介入する時もあれば、原作スルーをする時もある。

4．神だの相棒である霧生　零が一切出てこない。

5．話の都合上、元からチートの能力設定を更に、それこそクソみたいにチート化させる。

6．元々あったかは不明だが、恋愛描写。

一応迷ってますが、今の所は無いで通しますが、作者の気分で変わります。

7．戦闘描写及びオリ主無双乱舞の大減少。
まぁ、言う程無双してた描写を書いてた……のかはわかりませんが、戦闘描写は多分格段に減ります。（一応あるつもりです）

○共通する所

1．主人公の名前と容姿

2．家族構成（一部改変あり）

3．主人公の持つ能力。あれです、無腎蔵（ザ・インフィニティ）です。

4．ハーレムだのなんだの一切無し。
（捌ける気がしない）

5．駄文
（永遠にです）

主な違いは以上ですが、もしかしたら途中で心変わりする可能性が無きにしもあらずなので悪しからず。

尚、クオリティーの向上は絶望的ですが気が向いた時、目に入った時、究極に暇な時などに読み下さい。

以上

簡単なご説明（後書き）

次回から本編に入りますが、暫くは原作キャラとは関わる所か顔すら合わさない可能性がありまする。

0：私の名前はもぐ――霧生　零です（前書き）

まぁ、オープニングですな。

くだらねぇ始まり方は許して下さい。

0：私の名前はもぐ――霧生　零です

――世の中には、『ああ、あの時告白しとけば……』という、俗称“やらずに後悔する”と『ああ、告白して玉砕……最悪だ』の“やって後悔する”の二種類がある。

ちなみに俺は前述にも後述にも当て嵌まらない微妙な位置にあるのだが、それはまた追々説明しよう。

「ズルズル……！」

ウム、このカップ麺は中々どーしてだな、思い切っての『ご当地○○ラーメン』の唄い文句につられて、何時もより百円多く出した甲斐があるってもんだが、いかんせん量が少ないのがネックだな。

「ご馳走様でした……」

と、誰も居ないくたびれたアパートの一室に俺こと、霧生　零は住んでいる。

家族なんて者は居ない……いや、この世界にはいない、と言った方が正解か……。

何故、“この世界”等と表現するかというと、それは約一週間程前に遡る必要があるのだが、その事はまた後で説明するとして、今は食後のブレイクタイムに移行しよう。

「ヤニとライターは……あったあった」

テーブルの上に無造作に置いてあったタバコ、ＬＵＣＫＹ　ＳＴＲＩＫＥとＡＮＧＥＬと刻み込まれたＺＩＰＰＯライターを手前に引き寄せた後、タバコを口にくわえ、火を点けて吸う。
紙巻きタバコ故なのか知らないが、巻いてある紙がチリチリと静かで淋しい部屋の中にまるで『お前が一人でも、俺が居るから安心せぇや！』と励ますように静かに音を立てる。て、現在進行形で自分に酔って格好付けているが、実際問題んな事は有り得ないし、本気で聞こえるとか言ってしまった奴は診療内科に行く事をオススメする。

「フゥ〜」

口の中に含んだ煙りを吸い込み、肺の中に浸透させて吐き出す……こういった行為にリフレッシュ後悔を期待出来るのだから凄い。
と、喫煙がいかに素晴らしいかを勝手にアピールしている訳なのだが、嫌煙家さんからしたらこの行為すら迷惑千万だろう。
なんせ、自身がフィルターから吸う紫煙より、火を点けた先から出る副流煙の方が人体に影響が出る割合がデカイと、何処かのお偉い学者様が言ってくれたお陰で、俺達喫煙家の肩身が狭苦しくなってしまっているのだから。
が、勝手に喫煙家を代表して物申させて頂くと、正直タバコから出てくる副流煙が人体に悪影響を及ぼすという理屈はまぁ、事実だからしょうがないとして、だ。
なら、戦時中や戦後とかにあった放射線とかはどう説明するんだ？
　こう俺は聞きたいね。

詳しく言わせて貰うと、放射能とタバコの副流煙、果たしてどちらが危険なのか？　そう聞けば、余程のお馬鹿ちゃんじゃ無い限り、『放射能』と答えるだろう。
そして、戦時中に放射能を直でバンバン浴びて尚且つ、放射能たっぷり漬けの野菜やら魚やら食ってきた戦時・戦後時代の方々が『今も現役バリバリじゃい！』と言わんばかりの元気っぷりで俺と将棋やら囲碁やら麻雀を嗜んだりするのだが、まさしく『これいかに？』だ。
また、当時の方達いわく、戦時中の空気の悪さからしたら、紫煙等屁でもねぇし、モクモク吸いまくってた喫煙暦何十年の方が、非・喫煙家の方達より長生きしたってのもまた事実だ。
結局の所、何が言いたいのかと言えば、確かにタバコを吸っても良い事はねぇさ、だからと言ってそこまで毛嫌いされてもねぇ？　こう言いたい訳だ。
まぁ、向こうからしたら健康に悪いだけじゃなくて、マナーが悪いだのと反論してくるだろうが、だったらアンタ等はゴミをポイ捨てした事ねぇか？　車やバイクの排気ガスも健康に良いとは思え無くね？　つーか俺達人間が居る時点で母なる大地である地球様が危険なんすけど？　とまぁ、何十年もの間に喫煙家と嫌煙家の不毛な争いが続いているのだ。

「フゥ……」

フィルターまで火種が行き渡った所で灰皿で揉み消す。
喫煙家と嫌煙家の不毛な争いの歴史話しで、本来の話題から右斜め４５。くらい話しが逸れたので修正する。
何故俺が『この世界』と心の中で誰に対して分からない説明をしていた訳……それは、今から調度一週間前に遡ってしまうのだが……。

続く

0：私の名前はもぐ――霧生　零です（後書き）

次回は何故零が、異なる世界に飛ばされたのか、が話しの内容ですが、まぁ、良くあるパターンですね。

1：てんぷら（テンプレ）？　ストリップ（トリップ）？　……ええっとどういう

この主人公は物事をすぐに信じ、尚且つすぐに諦める癖があります。

1：てんぷら（テンプレ）？　ストリップ（トリップ）？　……ええっとどういう

一週間前、自分の家の居間で飯を食いながらも、俺は珍しくやる気に満ちていた。

「やるぞ……やってやる……やってみせましょう！」

「……？　どうしたの？」

ブツブツと端からみたら不審者全開の俺を、何も知らない様子で見てくる女性一人。
女性の姿は、ぱっと見自分と同年代の姿、身内贔屓差し引いても余裕で美人に入る容姿……なのだが。

「フッ……何でも無いよ……婆ちゃん」

目の前に居る人物に無駄にカッコつけながら言うが、全く動じてない事から中々のショックを……いや、只の自爆なのだが。

「今日のれーくんは変だね」

「アハハ」

呑気な声色で話す婆ちゃんに、『行くな……！
まだ機ではない！！』と理性と言う名の獣が叫びまくってる。
この人は、俺の祖母……といっても血は繋がって無く、自身の本当の両親は今何処で何をしているのかは知らない、というか興味が全くない。
婆ちゃんの姿は、何かしらの力が働いてるお陰とかで、見事なまでの若々しさを誇り、俺も何かしらの力を持ってるが、その話しはまた後でにしよう。

「ご馳走様でした……。婆ちゃん、行ってくる」

「ん、いってらっしゃい、今日は遅くなるとかあるの？」

「愚問だね、俺が遅くなるまで家に帰らないなんて話あったかい？」

「……そうだったね。全く、健全な男子高校生がそんな事じゃ駄目じゃないか？」

と、表情の変化はさほど無いが、若干声の質が違う所、ダチと全く遊ばない俺を心配しているらしい。
別にダチがいない訳では無いし、遊びにもしょっちゅう誘われているのだが、俺としてはんな事よりさっさと家に帰って、“婆ちゃん成分”を摂取しなければ、干からびてミイラと化してしまう。まぁ、

そんなだからダチと遊ぶ暇等皆無なのさ。

「俺の中では、健全な男子高校生より、婆ちゃんが優先順位に入ってるからね……最近の遊びは、やたら金も掛かるし」

一回遊びに行く事に、諭吉の兄さんとか野口の兄さんが俺の財布から名残惜しそうに出て行ってしまうから、俺としては遊びになんて行く必要性を感じないのさ。

「ふ～ん？　まぁ、良いって言うんならこれ以上何も言わないけどさ」

「まぁ、そういう事だから。じゃあね……ってさっき言ったような？」

「言ってたけど、二回言ってはいけない決まりなんて無いし、良いんじゃない？　てな訳でいってらっしゃい」

家を出る時は、軽くハグをしてから出るというのが、我が家の昔からの決まりで、この行為も早十三年近くにもなるので、決してやましい事等考えてない。
二度言うが、やましい事等考えてないからな。

☆★☆★

《キーンコーンカーンコーン》

あっという間に、授業が終了し放課後。
周囲の人間は、『これから部活だ～』だの『遊び行くぜぇ！』だの騒いでいる中、俺は先程説明した通り、さっさと帰る。遊びに誘われても断ってる俺も一応は誘われたが、当たり障りの無い様にお断りさせて頂いた。
なんせ今日は、ある意味で俺にとっちゃあ“特別な日”なんだからな。

――
――――
――――――

「～♪♪」

辺りが暗くなってくる中、携帯を弄りながらの下校。
それが何時もの日課なのだが、今日は何時もと何か違う、ていうか俺以外に人様がいない。

「……？」

良くは分からないが、一つだけ認識出来た事……“恐怖”だ。
辺りが暗く、更に人がいねぇというのは恐怖を助長するのに十分過ぎるのに加え、何故か霧まで出て来てた。

「えっ？　えっ！？　何これマジ？」

元々オカルトな類は苦手だと自覚があるだけに、今の状況は極めて危険だと判断、だから走る、この嫌がらせに似た状況から脱出する為に。

「ゼエッ……！　ゼエッ！」

軽く３０分位は全力疾走したのが良かったのか、気が付けば霧だらけみたいな空間から脱出できた、のは良いが。

「此処は……何処やねん？」

別に関西人では無いのに、関西弁での独り言も仕方ないと、自分で言い訳がましいと思うが、だっていつの間にか知らない山中みたいな場所に行き着いてしまったんだよ？

「い、いやいやいや。待てって俺、確か真っ直ぐ走ったよな？」

来た道を見える範囲内で観察するが、全くと言っていい程に知らない山道だった。
「んな馬鹿な……」と口には出しつつ、内心不安だらけの中、元来た道を歩いて山を下りて街中に進む……すると。

「な、な、なな……」

目の前に広がる街並みに俺は只驚愕する。
何一つ俺の記憶と合致しないのだ。
そして思わず頭を抑えながら……。

「なんじゃこりゃあぁぁぁ！！！」

と、周囲の人目を気にせずに有名俳優さんの有名な名言を叫んでしまうのだった。

☆★☆★

「……」

あれから約三時間後、自分で出来る限りの情報収集を終えた俺は、取り合えず今居る状況の整理の為、聞いた事も無い名前のファミレ

スに居た。

「……」

まず、第一に知ったのは、此処はどうやら俺の居た世界とやらとは似てる様で全く違う世界だという事……という説明が明記されてる手帳を、もう何回目になるか分からなくなる位に読み返していた。もっと簡略化すると。

1. 平行世界に飛ばされた。

2. 何故か俺の服装が普段着。

3. 帰りたかったら手帳に書いてある条件のみ。

4. それまでの生活等は一番始めのみ力を貸すのみで、それ以降はこちら関与は一切せず。

1については、もう認める他無かった。
近くにあった交番に行き、カップ麺を食いつつ、いかがわしい本を読んでた青の国会権力さんに元に住んでいた世界の街を聞いたら「何言ってんだこいつ？」みたいな顔された揚句に「無い」と一言で終了した。
俺としては、カップ麺食いながらエロ本読んでる目の前の国家権力

振りかざし野郎の顔面を、原形が解らなくなる程にボッコボコにしてやりたい衝動に駆られたが、そんな事した瞬間に「はいお縄～」と逮捕されてしまうので我慢した。

2については、言った通りの意味で、何故か俺の服装が元の世界にいた時に着ていた学校指定の制服じゃ無くて、私服だった。
それも、一番安い服という、俺に恨みでもあんのかと言いたくなる位だ。

3については、少し救われた気がした。
なんせ帰れる可能性があったのだからな。
詳しい説明は最後にする。

4は、書いてる通りで、最初の自分で住む家と資金、身分証明その他、最低生活に必要な物が俺の持ってた鞄の中に詰め込まれてあり、それ以降、この手帳の作者は関与してこないらしいのだ。

「フウッ」

タバコを吸いつつ、今の状況を一通り整理した所で、最後の項目『何故俺がこの世界に飛ばされた』のか、だ。

「暇つぶしって……」

手帳に書いてある項目を読むたんびに怒りのあまり、声がボソリと出てしまう。
最後の項目ついてだ。
君の能力について、と説明書きに載ってた時はマジでビビったが、この手帳の作者が……言いづらいのだが、神様らしいのだ。
無論、最初は「ふざけろ、バッキャロイ！！」と手帳を地面に叩き付けたのは記憶に新しい。
だが手帳を読むにつれて、段々信じる他無いような気がして来たのだ。
てのも、婆ちゃんと爺ちゃんならまだしも、何故この作者が俺の能力を知ってるのか？　手帳の筆跡からしても、爺ちゃんと婆ちゃんの筆跡と一致しないから除外となると……居ないのだ、他に俺の能力を知ってる人間が。

「グビグビ」

メロンソーダを飲みながら、もう一度頭の中で整理をする。
この手帳の作者が、神様（仮）だとするにして次は、元の世界に帰る条件の整理だ。
……ここは何でも漫画か何かの世界らしく、俺が帰る為の条件は『その世界の原作ストーリーが終了する前に君が死ぬ事が出来たら、君の勝ちとし、元の世界に帰る事が出来るが、死ぬ事が出来なかったら永遠に君はその世界で生きる事になる』らしい。
正直「んだよ、簡単じゃねーか」思い早速中々のスピードを出してあった大型のダンプの前に飛び出し、自殺願望全開で自分から跳ねられてみたのだが……あら不思議、クソみたいな痛みと跳ねられた時の浮遊感来るだけで、死ぬ気配が全くしなかった。
それ処か、跳ねられた際に出来た傷や骨折が、瞬くまに修復してい

ったのだ。
これば かりは、齢１８歳にして一番驚かされた、確かに俺は普通に人には無い力が備わっちゃいるが、それはあくまで“他人様の力を吸収”するだけで、こんな化け物じみた回復力なんか持って無かったんだから。
ダンプに跳ねられて死ね無いと判った瞬間、即刻その場から立ち去り、ファミレスへと避難した。そう、これが第５の項目“能力強化と帰還方法”だ。
どうやら俺の能力は、この神様（仮）によってとてつもなく強大な力にしてくれたらしいな。
主に言うと……俺はそう簡単には死ねない身体になったらしく、いわく『例え肉体を消し炭にされようが、バラバラにされようが、宇宙空間に放り込まれようが、遺伝子レベルから消し去られようがｅｔｃ……とにかく一瞬で元に戻る』らしく、あろう事かそれプラス不老不死なんだと、手帳に書いてある。
この項目を見た時俺は思った……「あれ？　将棋で言う所の詰みじゃないですか？」と、一瞬思ったが、俺はこう考えてみた“致命傷レベルの攻撃を絶えず受けまくる”そうすれば、何時かは死ぬんじゃね？　と。
まぁ、この世界がどんな世界か知らないし、惑星破壊レベルの力を持った人間が居るとは到底思え無いが、何時か現れる事を願って手帳に明記されていたアジト兼、家に向かうのだった。
その際、家の様子を見た時に、抑えてた怒りが爆発したのは言うまでもないだろう。

続く

1：てんぷら（テンプレ）？　ストリップ（トリップ）？　……ええっとどう

次回は時系列が発覚します。

主人公の設定もどき（前書き）

まぁ、よくあるパターンッスね。

主人公の設定もどき

名前：霧生　零

年齢：１８（現→１４相当）

身長：１８３？（現→１７５？）

血液型：Ｒｈ－ＡＢ型

利き腕：左

神とか唄ってる存在によって、いつの間にか別世界に飛ばされてしまった青年。

本人は始めの方は、軽く信じちゃいなかったのだが、元居た世界との違いが次々と発覚したために、早い段階で認める。
原作ストーリーが終わる前に死ねば元の世界に帰れる、そうでなければ永遠に死ぬこと無く飛ばされた世界に閉じ込められてしまう、といった、罰ゲームみたい嫌がらせを無理矢理執行させらる。その為、日夜死ぬ方法を模索しているが、神とやらに勝手に実装されたチートボディのお陰で、そう簡単に死ねない体質になってしまう。

性格は、周囲に流されやすく、それに加えて死ぬ事ばかり考えてる為、時たま不気味がられる。
要は変態に近い思考回路。

好みの女性のタイプは“年上のお姉さんタイプ”で年下とかロリ系に全くと言って良い程反応を示さない。

容姿は普通にイケメンで、モテそうに見えるのだが、前述の好みのタイプ、性格が災いしてなのか余りモテてない。

能力１

突然変異（ミュータント）：無腎蔵（ゼロ・インフィニティ）

主人公が元々持つ能力。※能力名を一部変更しましたが、効果は変わりありませんので、詳しくは「人生は矛盾しっぱなし」の主人公設定をご覧ください。

その２

再臨（リセット）

全てをあるべき状態に戻す力。

主人公のチートボディの原理にて、別の能力からの干渉が一切不可能で、常時発動に加えコントロール不可。

この能力が常時発動しているお陰で、主人公がいくら致命傷を負おうが、遺伝子レベルで消され様が、人間が知りえる理屈を通りこして再臨（リセット）される。
この力の発動条件は、主人公が怪我を負ったり、死にかけると、主人公の意思とは関係無く発動するので、主人公が怪我を負わない時は発動はしないが、この能力のお陰で不老不死の不死身人間にされてしまう。

2：つーかこの世界の女（タレ）ってレベル高いな（前書き）

短いです。

2：つーかこの世界の女（タレ）ってレベル高いな

神とやらから状況を教えて貰い早8日……。

「ほら、ついたぞ！　降りろ」

「……ハァ」

俺は拉致られたのだ、中学校の進路相談員に。

「何時までもため息なんかついてねぇで、さっさと教室に向かいやがれや！！」

「イダッ！　わ、解りましたよ……っ！」

進路相談員からして見たら、学校に行きたくねぇオーラをバシバシ出しまくってる俺のケツを蹴りまくり、無理矢理学校へと強制送還させたのだ。全く、今の時代にそんな事をすれば、モンスターナンチャラと呼ばれる親からバンバンクレームが来ると言うのに、それを知ってか知らずか、この目の前に居る進路相談員は「でもそんなの関係ねぇ！！」と言わんばかりであれよあれよと俺を名もしらねぇ中学校に引っ張っていったのだ。

「じゃあ！　何かあったら俺んとこに来て良いからな。頑張って頂点（ペン）とってこいや！」

そんな進路相談員に後押しされ、何のだよ……とツッコミを心の中で入れながら言われた通りに教室へと向かうのだった。

「……ハァ」

処で、何故俺が中学生をやってるのかと言うと、何故かこの世界での俺の立ち位置は１４歳の中学生で、この世界の物語が始まる三年前からのスタートらしいのだ。
ちなみにに物語のタイトルは“めだかボックス”という名で、正直内容は知らない。ジャンプに載ってたとか手帳に書いてあったのを見て、ジャンプを読んでる筈の俺が知らないのが引っ掛かるが、今となってはどうでもいい、とにかく一刻も早い内に死んで家に帰って婆ちゃん成分を補給しなければ、生き地獄をリアルに体験コース直行だ。
まぁ、今の所は向こう三ヶ月は大丈夫なんだが。

「オット……此処が俺が名簿だけに入ってるクラスの教室か」

これから先、また中坊をやり直さなけりゃならんと思うと、不思議とテンションが下がってしまう……。

《ガラッ！》

「あ？」

「……」

下がったテンションの状態で、教室に入ろうと扉に手を掛けるか掛けないかの時に事件は起きた。なんつーか一言でいうと、デンジャラスな人が居た。

うん、背は……今の俺よりちょいと高い程度で、金髪ロングの憎い程のイケメン。

そして肩に担いでるのは……折れにくいように短く切った鉄パイプ……。

「フッ……古い番長気取りってか？」

「……」

鼻で笑いながらの一言が原因かはたまた、目の前に居たのがうざかったのかは定かでは無いが、肩に担ぐ感じで持ってた鉄パイプで顔面９発、頭頂部１１発、計２０発殴れた。うん、それはそれは清々しい位にぶっ叩かれたよ、だけどこの程度じゃあ死なない……てか死ねない。

出来れば後５億発位同じパワー、同じスピードで殴ってくれたら死

ねた可能性があったのに、地面に突っ伏した俺に満足したのか、さっさと帰っていった。
てかよ……何だこの学校は、人が殴られて倒れてるってのに周りはシカトですかい？　薄情にも程があるってもんだよ。

「イテテ……」

頭から血がダラダラ流れてる。
俺は一応、死にはしないが、痛いという感覚はあるので頭を摩りながら、教室に居る連中に文句の一言でもいってやろうと中に入ると、教室の真ん中に人の円が出来てた。最初は、宇宙人かなんかを信じてしまってる別の意味で怖い集団が、宇宙人とやらを呼び出す儀式でもしてるのかと思ってたら、どうやら違うらしい、皆の顔が青ざめているのだ。
不思議に思った俺は、円の中心を一般的な中学生より若干背が高いのを利用して覗くと、一人の女の子が俺と同じ様に頭からダラダラと血を流して倒れてるのだ。

「成る程な……」

誰も聞いてないと思う一言が俺の口から飛び出す、どうやら彼女は俺よりチョイト前にさっきの金髪ロング君の生贄か何かにされた様だ。
だから、俺が殴られた時はスルーされたって訳なのね。

「ってオイ！　君も頭から血が……！」

一人の男子君が俺のリアル血達磨人間状態に気付き、叫ぶと倒れてる女の子から俺に一斉に視線が向く。気が付くのが遅いぜ、よっちゃんよ……と最初に気付いてくれた男子、仮名“よっちゃん”に心の中でツッコミを入れてると、このリアル殺人未遂現場に耐えられなかった者達が、次々と気絶して行く。

当然、授業処では無く中止。

俺は保健室に強制連行されかけたが、既に傷口が塞がってる為断り（その際に、大半の名も知らぬクラスメイトに変な目で見られた）その前に女の子の方が大変そうだったので、意識を女の子の方に持ってくる事に上手く成功させたのと同時に、このクラスの女の子って結構レベル高いなぁ……と血だらけの顔をしながら、不謹慎な事を思う。まぁ、全員俺の好みの対象外ですがね。

続く

2：つーかこの世界の女（タレ）ってレベル高いな（後書き）

中学生時代の話しは飛び飛びで進みます。

３：「世の中を上手く渡る方法は、思った事をストレートに言わずに、オブラ

このお話の主人公は、結構人を突き放す言動が多いです

3：「世の中を上手く渡る方法は、思った事をストレートに言わずに、オブラ

――あの、会った瞬間に血達磨にされてしまった事件から早、何ヶ月か過ぎた。

「フ～」

その何ヶ月かの間に、校内で人気の無い場所を調査した場所に俺はタバコを吸いながら、ボケーッと黄昏れていた。
一応この数ヶ月の間は、色々な死に方を試してみたが、イマイチ効果的なのは無かった。
具体的に言うと、自分で刃物を身体中（男の勲章以外にだが）に刺しまくって失血死を狙ってみたのだが、死ねず。
ある時は、狭い部屋に一酸化炭素を充満させて安楽死も試してみたが、逆に良い睡眠薬がわりになってしまい効果無し。
またある時は、首吊り自殺を試すが、気を失うだけに留まり、これまた効果無し。そしてこけ最近は、阿久根君（一応設定的には先輩）を挑発して撲殺死を望んでみたのだが、「殺してくれぇ」と言ったのかがまずかったのか、気味悪がられて逆に近付きもしなくなってしまった。
しかも何時の間にか、俺が最初に見た時に血達磨にされていて、しかもそれ以降、ほぼ毎日の様にタコ殴りにされて居た黒神　めだかさんとやらが、何をしてくれたのか知らないが、阿久根君を改心させてしまったお陰で、この学校に居る間は恐らく、俺は死ね無くなったのだ。
そう……唯一“肉体的な暴力”という名の爆弾を解体してくれたのだ、黒神さんとやらは。

全く、余計な事をしてくれるよ。

「フゥ〜」

まぁしかし、たかが中坊如きが本気で人を殺(ヤ)れる訳も無いのも事実だし、これはこれで良かったのかもな。
改心させられた本人も満更でもなさそうだったし？　それに、次の目星が無い訳でも無い。
あの現・生徒会長である球磨川君とやらは、ごく近い将来何か強大な能力を手に入れてくれそうだしな？
なにせ、あの生徒会の副会長さんはアレだもんな。

「おやおや？　こんな所に校則違反者がいるぞ？」

っと……噂をすれば何とやらだな、と思いながら声がした方向へと首を傾ける。

「まだ授業は始まってないんですがね……」

「そんな事は分かってるよ。僕が言いたいのは、君が口にくわえてる物のことさ。」

ああ、タバコね。

ハイハイ解りましたよ、消せば良いんでしょ、消せば、と悪態をつきながら携帯灰皿で揉み消す。

「ほら、これで良いですか？　安心院先輩？」

キーホルダータイプの携帯灰皿を目の前にいる人物……安心院さんに見せ付けながら言うと、本人は「それで良い」と言わんばかりの顔をしながら頷く。
タバコ位、自由に吸わせてくれたっていいのにさ……と思っていると、昼休み終了のチャイムが鳴り響く。
フト見ると、校庭で遊んでいた何人かの生徒が、校舎の中に入るのが見える。
だが俺は、午後の授業もサボる気満々な為動かない。

「僕の事は親しみを込めて、安心院（あんしんいん）さんと呼んでくれたまえ……と再三に渡って言って来たのに、まだ言うつもりが無いみたいだね……」

「別に貴女と親しくなったつもりは無いですし、これかもあるとは思え無いんでね、悪いがお断りさせて頂きますよ……ファ～ァ」

欠伸混じりに、ハッキリと拒絶の意を伝えた後、その場にねっころがる。荷物は教室だし、このまま良い感じに日が当たるこの場所でお昼寝と洒落込む腹積もりだ。
放課後辺りに、真面目さんな黒神さんに絡まれるがね。

「……あ？　何だぁ、ま～だいたんですか？　安心院先輩、授業始まりまっせ～」

「君もだろ？」

「良いんですよ俺は、中学生なんて義務教育なんだから、単位なんてねぇし……てな訳お休み～」

シッシッと、追い払うような仕種をしつつ本当は知ってる癖に、業と煽る様にして言う。
てか寝たいから早く消えて欲しい、ハッキリ言って……邪魔だ。

「君は……」

「あん？」

「君はどうして何時も僕を邪険にするのかな、僕に恨みでもあるの？」

軽く瞼を閉じつつ安心院さんの話を聞く。
邪険、ねぇ。

「何時も、と言うほど貴女に会ってた気がし無いんですがね」

「そうだったかな？　確か今日を入れて２５回は顔を合わせてるんだけど」

「なに？　そんなに会ってたんすか？　なら今度からはお互い、０回を目指しょう」

くだらねぇ事言ってないでとっとと消えて欲しい、別にアンタに恨みなんか無いが、アンタの顔（ツラ）を見てると、逢いたくて仕方が無い女（ヒト）性が頭の中に浮かんでしまう……。
だからこれ以上、俺に関わらないで欲しい、と流石に声には出さないが、思ってしまう。

「……」

「……」

何時もなら、此処から妙な言い回しで俺を更にイラ付かせるのだが、今日は妙に大人しなと思うのと同時に、逆に何も言ってこないで俺を見下ろしている人物に腹が立って来る。

「……チッ」

思わず舌打ちをしながら、これ以上この空間に居ると苛々した感情が爆発するので、直ぐに別の場所へと移動して、そこで昼寝の再開をしようと思い、仰向けに横たわってた状態から重い身体を起こして、第二の安住の地へと足を運ぶ。

「……」

「……」

歩く……。

「……」

「……」

止まる、後ろを見る。

何か居る。

「……」

「……」

歩く……。

「……」

「……」

止まる、そして後ろを見る。
何か居る。

「……何ですか？」

いい加減欝陶しいので、一定の距離を保ちながらついてくる安心院さんに怒りを抑えながら聞く。

「別に……君と同じ方向に用があるだけさ」

「……」

ほほぅ？　なら。

「そうでっか、なら俺は気が変わったんで、元の場所に戻って寝ますから……安心院先輩はこの先にある用事とやらを頑張ってくださいね」

と、恐らく自分で見ても、小憎たらしい笑みを浮かべながら、心にも無い事をすれ違い様に言い、元居た昼寝場所に向かいお昼寝モードに移行する。

流石の安心院さんも、それ以降はついてこなかった。

ちなみに何時もの俺なら、あそこまで人を邪険にしないつもりだし、ましてや人嫌いじゃない、それ相応の理由がある。

あの安心院さんの顔は似過ぎ……いや全く同じなのだ、婆ちゃんに。

いや、婆ちゃんの方が安らぎオーラが出てるから、一概には同じとは言え無いし、そもそもあの人と婆ちゃんを一緒にするつもりは無い。

そりゃあ、最初に見た時は本気でびっくりはしたが。

だけど、安心院さんを見るたんび、俺の胸は苦しくなる……万が一いや億が一にでも、二度と婆ちゃんに逢え無くなるかもしれない不安感……。

だからあの人とだけは、必要以上に親しくするつもりは無い。

でないと、取り込まれてしまう、あの人に……安心院さんに。

「畜生……」

気晴らしのタバコも味がまずく感じる、午後だった。

そして更に数ヶ月後。球磨川君が何かしらをした影響か、安心院さんが……一部の人間以外の者の記憶から消えた。

続く

３：「世の中を上手く渡る方法は、思った事をストレートに言わずに、オブラ

次回……又はその次辺りから、原作に入ります。

４：「学校と学園って……つぶあんとこしあんの違いと同じ……じゃねぇか」

どなたが知りませぬが、このお粗末小説を評価して頂き、ありがとうございます。

これかも地味に頑張りたいと思います。

さて、今回で中学生時代は終了します。

4：「学校と学園って……つぶあんとこしあんの違いと同じ……じゃねぇか」

あれよあれよと二年の時が過ぎ、季節は出会いと別れの春。
無事に中学を卒業してしまった俺は、もう何に対しても嫌になってきてた。

「……ハァ」

この二年もの間、何があった訳も無く、結局死ぬ事が出来ずにズルズルとそしてグダグダとこの世界で生きて来た。
死ぬ為に様々な策を張り巡らし、ある時はヤの付く人が経営する違法賭博会場に出向いてわざと馬鹿勝ちをし、ヤのつく人のイチャモンにわざと反抗、そしてドラム缶コンク詰めにされて、東京湾沈められたりしても死ねず、スカイダイビングをやった時は、パラシュートを開かずに上空一万メートル転落死を試みてもやっぱり死ねない。まぁ、そんなこんなで、二年が過ぎたって訳だ……。

「ハァ……」

そして今では、日に三回はため息をつくのが日課になってしまった。
ちなみに、当の昔に婆ちゃん成分が切れたのだが、どうも俺の思考回路が“どうしたら死ねる”とか“どう挑発したら殺してくれる”で頭が一杯で婆ちゃん成分が無くても生きられる状態なのだが。

「逢いたいな……」

二年という決して長くは歳月……それでも逢いたい気持ちは変わらない……いや、以前よりも逢いたい気持ちが強くなってる。
そう……自身の能力（チカラ）の様に。

「……」

自分の掌を見ながら、二年前の時の能力（チカラ）を思い出す。
今日で分かった事だが、俺の能力（チカラ）は一年周期で増大していってる。
始めの一年は、気が付か無かったのだが、今日この瞬間、俺の中に存在する二つの能力……婆ちゃんから名を貰った能力、無腎蔵（ゼロ・インフィニティ）と奴が勝手に俺の中に容れてきやがった再臨（リセット）の力が増大して行くのが解る。

「早く死なないと……もう時間が無い」

あの手帳に明記されてるのが本当なら、タイムリミットは後三年、俺がこの世界に飛ばされる前の年齢になった瞬間に……俺は奴の暇つぶしの勝負とやらに負ける。
何故なら俺が１８歳になった時、一年周期の力の増大とは比べ物になら無い位に能力（チカラ）が肥大化する。原作ストーリーが終了するとか関係無い、認めたくもねぇが、その時点で俺は完全に不死の生物になっちまうらしいのだ、そうなれば誰にも彼にも俺を殺す事が出来ず、自ら死ぬ事も出来ない。
それだけは……。

「絶対に……死んでやる！！」

端から見れば、危ない人みたいな発言をしてるのだが、生憎自分の部屋なのでその様な心配は皆無だ……それはそれで寂しいもんなのだが。

☆★☆★

その夜……。

「明日からまた、高校生、か」

高校の“箱庭学園入学案内”と有りがちな文字がタイトルになってる資料を読みながら、また面倒な学生生活を送るのかねぇ、と肉体年齢と精神年齢のギャップを感じながら缶ビールを片手に柿ピーをポリポリと食う。

何故中坊の頃にサボりまくってた俺が高校に行く嵌めになったのかというと、あの進路相談員が余計な気を利かせてくれたお陰だ。

勿論最初は断ったが、進路相談員いわく、中々の身体能力を持つ者達がいたり、喧嘩が強そうな所謂“猛者”と呼ばれる奴らがゴロゴロといると言うので興味本位で願書を出したのだが、次の日になって、合格通知書が我が家のポストに何故か投函されていた。

～数ヶ月前～

（何故に？）

意味が解らない状態で、進路相談員にその事を説明すると「よくやったな！！」と怪しむそぶりすら見せずに、暑苦しい抱擁をして来た。
これが女……しかも年上のお姉ちゃんとかだったらどれだけ良かった事か……と思いつつ、目の前にいる進路相談員は、もしかしたら真性の馬鹿なのかもしれない……と一人考えたのは記憶に新しい。
しかも……。

「よしっ！　お祝いだ、学園の制服やらその他必要な物を買ってやらぁ！！」

「はぁ！？　いや、良いから！！」

この三年で、一番絡む割合が多かったのが、この進路相談員だったのだが、流石にそこまでして貰う義理は無いので断った。だが、この強引な進路相談員は、全く聞く耳持たずに、学校に必要な物全てを買い揃えてくれたのだ。

「よし、これでお前は、気兼ね無く箱庭学園で頂点（テッペン）とってこいやっ

！」

「いやだから、何のだよ……」

人の話を聞かない人だと、三年もの間に分かってた事で、半ば諦めながら聞くしか無く、結局、箱庭学園に行かなければいけなくなってしまったのだ。

〜回想終了〜

「グビッグビッ……ぷっはぁ！　まぁ、暫くは学校に行って、俺を殺せる相手が居るかどうか捜す事にするかなぁ」

４本目のビールが飲み終わり、明日の入学式に出る事を、取り合えず決めてさっさと寝る事にした。

（しかし……未だに不思議だな。何で俺が合格？　あれだけ中坊やってた時はわざと悪い事してた気がしたんだかな）

布団を被り、天井を眺めながらあの学園の事を考える。
授業には殆ど出ず、学校は直ぐ抜け出しサボり、そのままパチンコ店直行等々……逆に素行が悪いのが目だったのだろうか？　と今更考えた所で遅すぎるのだがな。

「まぁ明日は、ほんのちょっぴり楽しみだな」

あの進路相談員が言うんだから、良い奴の一人や二人居るだろう、……

いなかったら……うん、その時考えよ。

続く

４：「学校と学園って……つぶあんとこしあんの違いと同じ……じゃねぇか」

主人公は原作を知らないので、自身の利益になる為ならいきなり突撃をかます事が多々あるかもしれません。

設定2（前書き）

タイトル通りその2です。

設定2

名前：霧生　零

年齢：１６歳（本来の年齢は１８）

身長：１８０？（後に３？程伸びる）

血液型：Ｒｈ－ＡＢ型

容姿：ジュエルペットに登場するキャラ、アンディ王子と全く一緒
（知らない方はは画像検索でもして下さい）

結局何だかんだで、この世界で三年程生きて少し成長した青年。
本人はさっさと死にたいのだが、チートボディのお陰で死ね無い、
そして殺されないので全体の三割程、諦めモードに入ってるが“婆
ちゃんに逢いたい”を行動原理に頑張ってる。

性格は、死ぬ為には他者を平気で利用し、その者に利用価値が消え
た瞬間、表には出さないが、その者に対して一切の興味を示さなく
なる。

それ以外は、「健全な死にたがりの学生」と自称している。
そして相変わらずモテない……とまでは行かなくなったのだが、性格や素行に一癖、二癖もある人間からは妙にモテる。

能力1

突然変異者（ミュータント）

無腎蔵（ゼロ・インフィニティ）

他者の能力を取り込み、自身の尺度で永続に昇華させる能力。
1年周期で能力が強くなっていってる。

能力2

再臨（リセット）

主人公のチートボディの原理にてコントロール不可能。
こちらも1年周期で能力が強くなっていってる。

設定2（後書き）

次回から原作入ります。

5：「入学式？　ああ、つまんねーからサボるよ？」（前書き）

主人公は別に不良じゃありません。

単に面倒臭さがりなだけです。

5：「入学式？　ああ、つまんねーからサボるよ？」

花粉症の季節の春。
願書を提出しに行った時から感じてた学園のデカさに平常運行まっしぐらのテンションで学園の門をくぐった。

（右を見ても、左を見ても知らん顔ばっか……）

学園の広さと周囲の人の多さに、早くも帰りたくなったが、中学の時の進路相談員のメンツの為にも今日位は一応行ってやらないといけない気がしたので来たのだが……。

（ダルゥ……）

クラス訳も程なくして終わり、俺が通う事になった一年一組の教室に入り、時間までの自由時間が暇で仕方ない。
なんせ、知り合いのしの字も居ないのだ。

（ああ、帰りてぇ帰りてぇ帰りてぇ帰りてぇ帰りてぇ）

脳内でずっとＢＧＭのように帰りてぇがコール流れる。
つーかさっきから周りの餓鬼共が、俺を見ながらヒソヒソと話してやがるのが鬱陶しい、俺は見世物でもましてや食い倒れ人形でも無

い。

（我慢しろ……此処でブチ切れてこのガキ共をぶちのめしたら、それこそ俺の計画がパァだ）

此処は、古今東西昔からある机に突っ伏して睡眠学習モードが一番だと思い、お眠りに入るが。

「ねーねー！」

「……ＺＺＺ」

誰だか知らないが、俺の背中をチョンチョンと突きながら呼ぶ。対して俺は、古今東西である“シカト”を発動中。

「ねーねーってば！」

「……ＺＺＺ」

我慢しろ、キレるな俺。

「オ～イ寝てるの？　寝てたら返事してよ～」

「だぁぁぁ！！　るっせぇぞゴラァ！！！」

俺の制服を引っ張りながら起こしに来やがって……決まりだ、ブッ殺す、と並々ならぬ決意の下、目の前いたチビなクソガキを睨む。

「オウ！　ワレェ、よくもワシを起こしてくれたのぉ！！」

人に聞けは１００％ヤー公の口調ですと言わんばかりの形相と口調で、目の前のアホ毛チビ餓鬼（見た目判断）の頭を片手で掴み、自分目線まで持ち上げる。
周りが「こ、殺される」とか「うほっ、いい男」等と言ってるが知らん。

「いやーゴメンゴメン。機嫌が悪かったみたいだねっ」
何だこのチビ、全くヒビッて無いばかりか、腹の立つ笑顔を見せてきやがったぜ。

「今の俺は最っ高に気分が良いんでね、この窓から放り投げて擬似スカイダイビングの刑に処してやるよ」

これで普通の人間は死ねるのだから、羨ましい事この上ない。

「アハハッ！　その前に君の足元にあるメモ帳を拾ってくれると嬉しいんだけどなぁ」

「あ？」

最後の遺言か？　と思いながら自分の足元を見ると、確かに今時の餓鬼が使用しそうなメモ帳が。

「なんだこれ？」

「それ、アタシのなんだけど、返してくれると嬉しいなぁ……な～んて」

「あ？　ああ、ほら」

「アリガト……ついでに降ろしてくれると嬉しいなぁ、ってね」

「え？　お、おお」

アホ毛チビ餓鬼の言われた通りに降ろす。
何か言いくるめられてる気がしないでも無いが。

「うん、それじゃあ拾ってくれてありがとうね〜！！」

そして風の様に、俺の前から姿を消した。

「なんだったんだ？」

もはや、怒りも湧いて来なくなったので、その場に座る。
周囲の餓鬼共が俺をスゲェ目で見てくるので、たまたま筆記用具容れの中にあったカッターを取り出し、刃を出したし引っ込めたりしたら、一斉に視線を逸らしてくれた。しかしあのチビ……友達には慣れそうにないな、気にはなるがね。
第一、メモ帳を取る位で俺を起こそうとする意味が解らない。
だとすれば、単に俺が珍しかったのか？　まぁいい、いずれにせよだ。

（確かに、アンタの言った通り……この学校は面白いかもな）

心の何処かで、余り期待しちゃあ居なかったが……フフフ、少し評価を改める必要ありだな。

☆★☆★

それから暫くして、入学式が始まったが当然の如く出席してない。

所詮入学式なんて何処の学校も同じだろうし、何より今は喫煙場所の捜索が先だ。

（体育館裏、旧校舎裏、そして時計台の頂上。フフン、この学校は穴場がいっぱいだぜ）

既に頭の中は、ヤニ、ニコチン、タバコ、煙り、と続け様に流れていく。学校の為にニコチン摂取が出来ねぇとかフザケテやがるからなぁ。

（んで、最後が……）

どっかの屋敷みてぇなデカサを誇る建物を見上げていた。
此処は剣道場……噂によると、剣道部が廃部になった後に不良のたまり場になったとかならないとか。

「さて、小僧共は仲良くしてくれるかな？」

まぁ、いざとなれば全員追い出しゃあ良いんですけどね。

★☆★☆

「1年坊！　ここ座れや！！」

「ウ〜ッス」

「1年坊、火ぃかせや火！！」

「オイ〜ッス」

結論、直ぐに仲良くなりました。
いやぁ、こうも簡単に仲良くなれるとはねぇ。
先輩方いわく『オメェから同じ匂いを感じる』ってんで、凄い歓迎されちまったよ。

「そういや、知ってるか、新しい生徒会長？」

俺が先輩方のタバコに火を点けてると、誰かが不意に話題を振って来た。その内容が非常に興味深いので聞いてみる。

「生徒会長ぉ？　なんだそりゃあ？」

「なんでも、スゲェ奴が生徒会長になったとか……」

「ああ、しかも1年らしいぜ？」

「明日の朝会辺りに出て来るとか」

「どんな奴なんだ？」

「聞いた話じゃ、化物みたいな奴だとか……」

「それ俺も聞いた、なんでも3Mはある巨人とか」

いる訳ねぇだろ、んな奴と思いながらも、明日の朝会は出てみますかと思うのだった。

続く

5：「入学式？　ああ、つまんねーからサボるよ？」（後書き）

次回から本格的に原作突入です。

６：「『２４時間３６５日誰からの相談を受け付ける』……いやいや、男が

あえて原作沿いに主人公を突っ込む……と見せ掛けて、です。

クオリティーは何時も通りです。

６：「『２４時間３６５日誰からの相談を受け付ける』……いやいや、男が

～何だかんだで数日後～

『世界は平凡か？　未来は退屈か？　現実は適当か？』

「ふぁ～あ……ねみぃ」

『安心しろ、それでも生きてることは劇的だ！』

（今日の夕飯何にすっかなぁ……）

『そんな訳で本日より、この私が貴様達の生徒会長だ。　学業・恋愛・家庭・労働・私生活に至るまで、悩み事があれば迷わず目安箱に投書するがよい』

（あっ、塩と醤油切らしてたんだった。帰りに買わないと……）

『２４時間３６５日、私は誰からの相談でも受け付ける！！』

「やべぇ、タバコも補充しとかねぇとな」

体育館の外まで響く女の子の声をバックに、俺こと霧生零は黄昏れ

ていた。
いや、最初はきちんと中に入って噂の生徒会長さんのツラを拝もうとしたのだが、なんか怠くなったので音声が聞こえる場所まで行って、そこでサボる事にしたのだ。

「ふわぁ……ねみぃ」

今日になって何回言ったか解らない。
なんせ昨日は、珍しい高レートの雀荘に行って遅くまでジャラジャラやってたからなぁ。
まぁ、結果だけ言えば勝ったけどね、四暗刻・大三元の西の単騎待ちが炸裂した時の爽快感は半端無い、一気に点差が開いたし。

「今日もタルいし、帰ろうかなぁ……」

学校に登校して約一時間チョイ、早くも俺の中の悪魔が『帰って寝た方が良いぜぇ、ケケケ！』と囁いてる様な気がしてる。

「うん、決めた……帰ろう！」

心の中の天使が『真面目に授業を受けなさい！』とか言ってる気がしないでも無いが、悪魔の方と契約を交わした俺にはもはや聞こえなかった。

☆★☆★

教室に戻ると、俺の席の隣の席にて突っ伏しながら何かブツブツ言ってる野郎一人と、誰かの噂をしている昨日のアホ毛チビ餓鬼がいる。

「……」

その横をさりげなく座り、鞄を取りながら帰りの準備をする。
横の二人以外の餓鬼共が俺を『何でいんの？』みてぇなツラで俺を見てくるが、もはや慣れたもんだ。

（よし、準備完了……か～えろっと）

今日の夕飯は何にすっかなぁ、とか考えながら帰る為に席を立つが、隣にチョロチョロと動いてたアホ毛チビ餓鬼が喋ってるのが聞こえる。
しかし今更だが、この学校の制服って、なんかダサいな。

「しっかし、あのお嬢様。全校生徒の前でよくあんな啖呵が切れるもんだよ、人前に立つのに慣れてるっつーかさー」

「カッ！」

横目で何気なく聞いていると、机に突っ伏してた男子が、苛々した感じで身体を起こす。

「ありゃあ人の前に立つのに慣れてるをじゃねーよ、人の上に（・・・・）立つのに慣れてんだ！」

「んーそうだね。そうでなきゃ、1年生で生徒会長になれないもんねー」

ああ、何だ生徒会長の噂ねぇ、周りの餓鬼共と一緒か。
まぁ、俺はその生徒会長さんのツラを見ちゃいねぇからな、話題についていけんな。
そもそも集団の輪に入る事はもはや不可能だが。……ってくだらねぇ事考えてないで早く帰ろうと思い席を立った瞬間、
椅子が後ろの机に良い感じで当たったお陰で、中々の音がした。

「あ……」

思わず出てしまった俺の声。

「うん？」

「あん？」

直ぐ隣に居たアホ毛チビ餓鬼と金髪坊やがこちらに気付く声。

「……何？」

何でか知らないが、俺の顔をジーッと見てきやがる目の前の餓鬼二人。
肉体年齢的には同い年かもしれないが、精神年齢は二十歳ぐらいあるからな、頭の中では餓鬼と認定してるのだ。
声には出さないがね。

「あれ？　君って昨日の……？」

「ああこの前、睡眠妨害してくれたチビね……」

取り合えず、あたかも今気付きましたみたいな感じで話を合わせる。

「チビって、そりゃあいくらなんでも――「霧生！？」……え？」

「は？」

アホ毛チビ餓鬼との会話とは余り言えない行為に勤しんでると、後ろに居た金髪ボーヤが指差しながら俺の苗字を叫ぶ。
てか、あんまり目立ちたくねぇからデケェ声で俺の名前を呼んで欲しく無いし、何故テメェが俺の名前を知ってるんだよ。

「えーっと、何で君が俺の名前を知ってんの？　……どっかで会ったっけか？」

『ワレェ！！　何処の組の者じゃコラァ！！』とは言え無いので、比較的優しめに聞く。
真面目な話、こんな金髪ボーヤの事等知らないし。

「人吉善吉だよ。ホラ、中学の時に同じクラスだったろ！？」

中学？　いや、俺殆ど授業サボってて当時のクラスの顔と名前なんて覚えちゃいないんだけど。

「ん～？　ゴメン覚えてないや」

「そうか……あっ、なら黒神めだかは知ってんだろ！？」

「ん？　あ～　よ～く覚えてるぜ、授業サボるたんびに絡んで来た女の子だろ？」

ヒデェ時は、無理矢理連行されそうになった事もあったっけな、逃げたがね。

「そうそう、そん時に横に黒い髪をオールバックにした奴がいたろ？」

オールバック？　……あっ、ちょっと思い出して来た。

「いたけど……え？　あの時の子って君なの？」

「思い出したか！？　それが俺だよ」

お、オイオイ。マジかよ、人って髪型が変わるだけで分からなくなるもんだなぁ。

「そうなんだ……ほぇ～
わかんねぇもんだなぁ」

「まぁ、あの後直ぐに周りから『ダサい』って言われて直ぐに戻し

たからな」

「へぇ……所であの子は元気なの？」

「あの子って……ああ、あいつの事か？　その言い方だと、あいつがここの生徒会長になったの知らないのか？」

「そうだったの？　ゴメン、俺朝会サボってたからさぁ」

「ハハッ、相変わらずだなぁ」

苦笑いしている金髪ボーヤ改め、人吉君から聞いた情報に少しばかり驚かされたぜ。
確かに今からしたら聞いた様な声だった気がしたけど、まさかこの学校にいるとは。
参ったな……あの子が生徒会長となると、少しばかりめんどうになりそうだな。

「あの～」

「「ん？」」

二人で軽い会話を交わしていたら、いつの間にか空気って奴になりかけてたアホ毛チビ餓鬼が、会話に乱入して来た。

「いやー二人共、アタシの事忘れてるっぽいかなぁ～なんて……」

「……スマン、正直忘れてた」

普通に申し訳なさそうに謝る人吉君に対して俺は。

「申し訳ございません。正直に言えば意識して忘れようとしてました」

友達にはしたくないような言葉で攻める。
俗に言う軽めの毒舌だ。

「あはは……」

「相変わらずだなお前。なんつーか、わざと人を突き放す言動が目立つっつーか……ああ不知火、コイツが言う言葉は一々間に受ける必要なんて無いからな？　単なる挨拶代わりみてーなもんだし」

「アタシは全然気にしちゃいないから大丈夫だよー！　昨日も色々

あったしねー霧生く～ん？」

俺は人吉君の事を知らないのに、俺の事をある程度知ってるってのは妙な気分だな。
それとアホ毛チビ餓鬼改め不知火さんとやら、ニヤニヤしたツラで俺を見るなよ、この前のアレは結構マジだったんだからさ。

「人吉君がそこまで俺を知ってる理由を聞くのは置いといて、だ。新しい生徒会長さんの事が少しばかり気になるんだが……」

これ以上グダグダと話す気も無いので、さっさと内容の起動修正する。
適当に話をすれば、向こうも勝手に満足するだろうし、俺も気持ち良く帰れるって訳だ。

「あ？　ああ、あいつね……本当めんどうな事をしてくれたよなぁ～」

「それは本心で言ってるのか？」

「どういう事？　霧生君」

「ん？　ああ、この子……つーか人吉君ね、俺が中坊の時の記憶か

ら察するに、いっつも黒神さんと二人一緒だったからなぁ」

「へ〜？」

「ばっ！　誤解を招く言い方をすんな！！　あれはあいつが勝手にだなぁ！」

照れ隠しか何かで、まくし立てる人吉君。
ほほぅ、なら。

「不知火さん不知火さん、見て下さいよアレが俗に言う“ツンデレ”ってやつですぜ？」

「見ました見ましたよ〜霧生さん。全く何で素直になれないのですかねぇ」

流石だぜ不知火さん、やっぱりこの子は、人を引っ掻き回すタイプの様だな、アドリブもなんのそのでこなしてくれたぜ。

「お、お前等……さっきまで余り仲良くなかったよな？」

「えー？　これは別に仲が良いとかじゃ無いんだけど……」

「そうだよ人吉君、単なる“ボケ”と“ツッコミ”みたいなもんだよ……」

「「ねー？」」

「ぜってぇ仲が良いだろお前等！？」

人吉君のツッコミに久しぶりにゲラゲラと笑ってしまった。
不知火さんからのパスも良い感じで受け止められた俺は気分が良くなったのか、そのまま三人で談笑する事にした。
心の中の悪魔が『サボんじゃ無かったのかよ！？』とか言ってる気がしたが、面白けりゃそれで良いやになってしまった俺は普通にスルーを決め込む、別に俺は人嫌いじゃ無いし、普通に面白いのなら人に話掛ける事だってするさ。

～数分後～

「でもよ、確かにあの子は凄いケドさ……捏造ばっかだな、聞いた限りじゃ全長が２５０メーターあるとか聞いたんだけど」

「いやいや、ないない」

「あたしも聞いたよ、高度６万フィートをマッハ２で走行とか」

「何だよそれ、身体が超合金か何かで出来てるってんなら解るけど」

「つーかもはや人間じゃねーよ」

自然と生徒会長さんの話をしていた、なんせ話題が無いもんだから。

「んでさぁ、人吉」

「あ？」

「アンタもやっぱり生徒会に入るの？」

「あ、そりゃあ俺もきになるね」

まぁ、多分入るんだろうが。

「カッ、確かに何度も誘われちゃいるがな、これ以上あいつに振り回されるのはゴメンだな！　だから……」

予想はできるが、何かを宣言する為に一息入れ、そして。

「俺はぜってー！　生徒会には入らない！！！」

元々容姿は普通にカッコイイので、妙に決まっている人吉君なのだが……ああ、後ろに何かいなければもっとカッコイイのにな……。
多分隣に笑顔で固まってる不知火さんも似た様な感想を思ってる事だろう、うん。

「まぁ、そうつれない事を言うな善吉よ」

そして後ろに居た女の子は、人吉君の頭をガシッとわしづかみにする。
本人はこの世の終わりみたいな顔をしてる、成る程ねぇ性格は余り変わっちゃいねぇか。

「ん？」

「あ？」

何故か知らないけど、俺のツラを見て一瞬固まる生徒会長さん。
思わず喧嘩越しの口調の返事を返してしまったのは仕方がないでし

ょう。

「貴様は……」

「はい？」

「フッ、調度良い貴様も来い！！」

「えっ――グエッ！！」

そう言って俺の首根っこを掴みながら、連行して行く。
それを不知火さんはハンカチん振りながら見送るのが見える。
フッ、白状な子だぜ。

続く

６：「『２４時間３６５日誰からの相談を受け付ける』……いやいや、男が

先に言っときますが、主人公はチャラ男予備軍です。

7：「この俺に後退は無い！　在るのは前進全勝のみ！！」……う～む一度でいい言ってみたい。

いつの間にか総合評価が１００を越えてました……。
いやマジで恐縮です。
これをバネに頑張りたいです。
ありがとうございまする。

さて、今回で主人公のルートが決まってしまいましたが、先に言えば王道ルートって奴です。
元々はこのルートにするつもりは無かったのですが自分、二次創作で主人公ルートで話を作った事が無かったので、チャレンジの意味でやってみました。

ちなみにお互いの呼び名ついて突っ込みたい所があるとは思いますが、一々主人公を〇〇何年と長くなるのであえて下の名前で呼ばす様に無理矢理矯正しました。

そこのところは広い心で受け止めてくれたら幸いです。

それではどうぞ。

7：「この俺に後退は無い！　在るのは前進全勝のみ！！」……う～む一度でいい言ってみたい。

理不尽という言葉がある。
意味は『道理に合わない事』なのだが、今この瞬間にも俺はそれ（・・）を味わってる。

「霧生、大丈夫か？」

「人吉君さぁ……理不尽って言葉、誰が考えたんだろうね？」

「言いたい事は分かった……オイ！　普通に連れてこれねぇのかよ！？　生徒会長さんよぉ！！」

人吉君が目の前に仁王立ちして居る生徒会長さんに吠える。
出来たら俺も援護射撃をしてやりたい気分だ。

「フン、私の誘いを断り続ける貴様が悪い。それに昔のように“めだかちゃん”と呼ぶが良い」

「そんな事は今は良いんだよ！　俺はともかく、何で霧生を連れて来たんだよ？　見ろよ霧生の奴、余りに唐突な事が起こってボーッとしてやがるぞ？」

「……アハハハ、ちょうちょになりてぇ」

窓の向こう側に居る紋白蝶が羨ましいぜ。

「ム……。そうだな、善吉にも言って置くか……オイ、コッチを向け！！」

「ブヘッ！！」

頭に鈍い衝撃と共に意識が紋白蝶から元に戻る。決まった、文句を言ってやろう。

「ってなぁ……ゴラァ！　人の頭は叩けば６００万個の脳細胞が死滅するとか訳の分からない説が流れてるんだよぉ！！」

論点が軽くズレてる気がしないでも無いが、文句の一つ位言っても罰は当たらんだろう。

大体昔から苦手なんだよ、こういったタイプのガキ女（タレ）は。

「フン、人が折角引っ張って来たのに話を聞かないから悪いのだ」

「うわぁ……人吉君聞きました？　バッサリ切り捨てましたよ？
彼女は鬼ですか？」

「諦めろ霧生、奴は昔からそうだ」

「うん、何となく分かってたさ」

人吉君に慰めると言った情けない構図になってるにも関わらず、当の生徒会長さんはやり切った感丸だしの表情で制服を脱ぎだす。

「うぉーい！！　当たり前の様に人の後ろで着替えてるんじゃねー！！」

「？　私と貴様の間に恥じらいなんてないだろうに、少なく共小六の時まで、一緒に風呂に入った仲だろう？」

「昔の話だろうが！　それに霧生だっていんだろうが！！」

つーかよ、俺はこんな茶番劇を見せられる為に連れて来られた訳じゃねぇよな。
何か今になって眠気が来たんだけど。

「フン、奴なら別に問題は無い。その証拠に見ろ」

「ああ！？」

「ふぁ～あ……」

「よ、余裕な表情をしながらの欠伸……」

「あ～　ねみぃ」

「奴は中学の時の修学旅行の時に女湯に間違って入った時も、あんな態度だったしな」

「おい……」

俺の黒過ぎる歴史をほじくり返すなよ。

「あ～　オレも思い出した。確かすっげえ涼しい顔して何か言ったら、女子にタコ殴りにされてたって噂が……」

「君も思い出すなよ」

人吉君の言った通り、中学の修学旅行の時に何を間違ったのか、女湯に入ってしまった事がある。まぁ、中学生という餓鬼の肉体を見て欲情する変態なつもりは無いし、俺の好みの女性のタイプから大きく掛け離れた人種なので思わず鼻で笑いながら素っ裸の女の子達に向かって『乳臭い身体だな』と言ってしまい、女子全員からの報復を喰らったのだ。
結局死ぬ程のダメージは無かったが、多分生きて来た中では一番死に近いダメージだったかもしれない。

「俺のくだらない話は置いといて、だ。俺を連れてきた理由は何ですか？　まさか思い出話に花を咲かそうなんて事は無いでしょ？」

「フッ、相変わらずだな……何、善吉と貴様を呼んだ理由は他でも無い」

「「……」」

どーせ人吉君を呼んだ理由は分かるからアレだけど、俺を連行した理由がわからない為、何時に無く真面目に聞いてやろうと、生徒会長さんの顔を見る。

「改めて言おう二人共生徒会に入ってくれ、私は貴様等が必要だ」

誠意の篭った言葉と共に頭を下げる生徒会長さん。
人吉君は、何かを想ってるのかダンマリだが、俺は訳がわからない。

「ちょっと待って下さいや。俺が必要？　冗談は顔だけにして下さいよ、何で俺なんですか？」

マジで意味がわからない。
俺が必要って……俺は人吉君みたいな幼なじみとやらでも無いし、お世辞にも模範生徒じゃ無い。それに中学の時は決して仲が良かった訳では無いのだ。

「貴様は中学の時に私の言う事に全く従わない者の一人であり、尚且つ私以上に……だからな」

「！？　何だと？」

ボソりと言った言葉に、思わず口調が戻る。
まさかこの餓鬼……気付いてやがるのか？
俺が普通を通り越した存在だって。
なら……。

「どうだ？　頼む……私を手助けてくれ、霧生一年よ」

「……フッ」

「？」

「クックックッ……」

やべぇ、我慢が出来ねぇよ。

「クハハハハハハハハ！！　ハッ～ハハハハハァッ！！！」

多分この世界に来て、一番の笑い声を出したと思う。
まさかなぁ、こんな餓鬼に気付かれるたぁな。

「フゥ～　良いだろう！　アンタに着いてけば、俺の目的は更に完全なものになるからな！！」

「そうか、なら」

「ああ、生徒会とやらに入ってやんよ」

この餓鬼がこの世界の主人公だってのは、名前で分かってた。
なら逆に奴等の輪とやらに入って、いずれ来る死亡フラグとやらに真っ向からぶつかって……死んでやるよ。

「ではよろしく、生徒会長さん？」

「ウム、こちらこそ頼むぞ霧生一年」

「ノンノン、俺の事は零で構わんよ……まぁ、呼びたく無ければ良いんだケドね」

「良いだろう貴様は特別だからな、喜んで呼ばせて貰おうか。それなら私の事はめだかちゃんと呼ぶが良い“零”」

「フフッ、今だけ君が好きになれそうだよ“めだかちゃん”」

お互いに握手を交わしながら俺は思う。
今日を持って俺は生徒会に入る事になった、俺自身の目的の為に……頼むぜ？　黒神めだかよ、お前なら俺を殺してくれるかもしれないのだからな。

「さて、善吉はどうだ？　零は喜んで生徒会に入ってくれるらしいが、お前はどうだ？」

「ちくしょう、こんな状況で断れる訳ねぇだろうが。良いぜ、テメーに振り回されるのはもはや慣れっこだからな、俺も入ってやんぜ生徒会によー！！」

「決まりだな」

「だな」

黒神めだかが微笑むと同時に俺も薄く笑う。
人吉善吉君、君も俺の為に頑張って貰おうかな？　ククク……。
その後、何故か三人で円陣を組む事になった。
ハズイぜ……。

続く

おまけ

零
「そういや、俺と人吉君の役職って何さ？」

善吉

「俺の事は善吉で構わねーぜ」

零
「あ、マジ？　なら俺も零って呼んでくれや」

善吉
「おう！」

めだか
「役職については、後で言う、今は早速来た依頼を片付けてからだ」

零
「依頼？」

めだか
「『三年の不良達が剣道場をたまり場にしてます、どうか彼を追い出してください』だそうだ」

零
「え〝っ！？」

善吉
「ん？　どうかしたのか？」

零
「い、いや（俺もそのお仲間だった……って言えねぇ）」

めだか
「よし、行くぞ！！」

零
「（先輩達……ご愁傷様でござりまする）」

終わり

7：「この俺に後退は無い！　在るのは前進全勝のみ！！」……う～む一度でい

先に言っときます、主人公はニコ中です。

8：「勝つぞ……！　絶対に勝つぜぇ！！」とか言った瞬間負け確定さ（前書き

急ぎで書いた為に、話が飛び飛びのクオリティー最低です。

申し訳ございません。

8：「勝つぞ……！　絶対に勝つぜぇ！！」とか言った瞬間負け確定さ

――やはり世の中は解らないもんだ。
なんせ俺が生徒会とやに入る事になったのだから。
まぁ、それが普通の生徒会なら入りはしない、だがあの生徒会長さんは話は別だ、あの子は何かを持っている。
その何かのおこぼれを貰う為に俺は疲れない程度に頑張る事にしたのだ。

剣道場の件から一週間後……いやぁ、あの時は大変だったなぁ。
生徒会と先輩の板挟みをもろに受けたし、同じクラスの日向君とかいう奴（その時初めて知った）が良い感じでイッちゃってやがったのを善吉君とめだか君が上手く纏めてくれたし、俺も色々と裏で動いて上手く片付いたのは奇跡に近いぜ。
主に先輩達に土下座しまくったり、場合によっては殴りまくって記憶を消したりとか……。

「フゥ……生徒会室は、空調完備だからサボるのにはもって来いだな……ニコチンは摂取出来ねぇがね」

中々に日当たりも良いし、エアコン常備、これに灰皿が用意されてりゃあ言う事無しなんだがね。

「いやいや、お前未成年だよね？」

「アァン？　良いんだよ、俺の精神年齢は二十歳越えてっからさぁ……つーか俺がヤニ吸ってる事知らなかったっけか？」

「知ってたけどよ……学校に居る時ぐらいは我慢したらどうよ？　それに、その理屈は理屈にもなってねーぞ」

「アハハ……確かに」

実際問題、俺の精神年齢は二十歳過ぎなんだかな……と言った所で信じちゃくれないか。

「つーか善吉君よ……さっきから鏡の前で何してんのさ？　自分の姿に酔いしれてるの？」

さっきからソファでねっころがる俺の斜め前で、全身が写る鏡を前にして、生徒会専用の制服を着ながら、何やらため息をついてる善吉君が地味に気になるんだがね。

「ちげーよ。俺って黒の服が似合わねぇと思ってる訳でさ」

「はぁ、そうか？　俺は結構様になってるように見えるんだが」

実際に善吉君は普通に着こなしてる様に見えるんだが、一体何が気に入らないんだか。

「あ～あ、だから制服白のこのガッコにしたのによ」

「学校選ぶ理由が軽すぎ無いか？」

何その『ここのラーメンは気に入らねぇから、ちょっと県外まで行く』みたいなノリは。
流石にビックリよ？

「いやそんなことはない、善吉には黒が良く似合う」

おう？　いつの間に善吉君の後ろで同じポーズしているめだか君が居るぜ、ボケーッとしてたから気付かんかった。

「どぅわっ！　だからなんでお前はいつもいきなり後ろにいるんだよ！！」

そして何時もの様に驚く善吉君。

「チョリ～ッス！　めだかちゃん」

軽目の挨拶をする俺に対して、ウムと一言返しためだか君。

「善吉よ、見てくれが気になるなら内側にジャージでも着てみたらどうだ？　きっと格好よいであろう」

めだか君の提案にほほぅとなる俺。
確かにカッチョよさげな気がするからね。
んで案の定半信半疑で中にジャージを着てから制服を羽織るとあら不思議、トラックの運ちゃんみたいな格好の出来上がりだ。

「デッ、デビルかっけぇ！！　反骨精神のカタマリみてーだ！」

「良いなぁ善吉君……オリジナリティある格好に加えて普通に似合ってるし……」

「そ、そうか？」

テレテレしてる善吉君に対して普通に羨ましいと思う俺。
いや、普通に格好良いっしょアレ？　なんか世間じゃダサいみてーな事言われてる気がするが、少なく共俺は良いなぁと思うぞ。

「ねぇねぇ、時々真似して良いかな？」

「おう！　どんどん真似てくれ！！」

お、おおふ……ニカッと笑う善吉君が眩しいぜ。

「制服の話はそこまでにして、そろそろ目安箱のチェックの結果を言うぞ」

会長専用の机の上に目安箱を置き中に入ってある紙を取り出す。
あ、ちなみに俺は普通に制服着てるだけです。

「明日から目安箱の管理は庶務である善吉の仕事だ。本生徒会の最優先事項だから、決して手を抜かぬ様に」

「へ～い」

けだる気に返事をする善吉君。
彼の役職は庶務で、ちなみに俺は……。

「ねぇ、俺に対しての仕事は何か無いの？」

「“役員補佐”である貴様は今の所は善吉の補佐をしてくれ、今の所私が手を貸して欲しい所は無いからな」

「うぃ〜」

これが俺の役職“役員補佐”で内容は他の生徒会役員の手伝い及び意見出しで、なんでも緊急時には生徒会長と同じ権限を持つ事が出来るとか……。
まぁ緊急時以外は庶務と殆ど（・・）変わらないのだがね。

「でもさぁ、俺の役職って十代前の生徒会で無くなったとか聞いたんだけど、何で今更復活させたのさ？」

「先日も言った通り、私は貴様……零に手を貸して欲しいとは言ったが、お前が私の下というのは私自身納得がいかないからな。だから緊急時に会長と同じ権限を持つ事が許される役員補佐を復活させたのだ」

「ふ〜ん、別に俺は下でも構わないんだけどなぁ」

「それじゃあ私が納得出来ないのだ。とにかく貴様は役員補佐で決定だ」

「へいへ～い」

「では早速来た依頼を片付けるぞ」

「ウ～ッス！」

「おうっ！」

まっ、この子の近くにいりゃあ、いずれでかいヤマが来るはずだしその時までは無難に従わせて頂きますよ。

☆★★☆

つー訳で目安箱に投書された依頼をやる事に。

「ふむ、今回はちゃんと記名されてるみたいだな」

「あの……ごめんなさい。本当はこんなこと下級生のあなた達に相談することじゃないかもしれないんだけど……」

「下級生？　……って事は貴女は先輩？」

「え、ええ……（なにこの子……）」

「なんだ貴様、ちゃんと投書の内容を読んで無かったのか？」

「まぁ、一人が内容を把握してりゃあアレかなって……で、ちなみに学年は？」

「二年九組……だけど」

「ほほぅ、な～るほど、へぇ？」

「おい零、急にニヤニヤしてどうしたんだよ？」

フッ、後ろの二人が俺の好みの女性のタイプを知ってる筈無い、か。それにしてもフムフム、年上かぁ。良いね良いねぇ、テンション上がって来ましたたよ？

「よし、遠慮はいりません。俺達は誰からの相談を受け付けるがモットーですから、ササッ！　お茶をどうぞ」

先輩……いや有明さんにお茶を出す。
一応精神年齢から考えたら年下なのだが、肉体年齢的にはこの方のほうが上なので最上級の敬意を表するぜ。
結局俺は言ってる事が曖昧なのだよ。

「あ、ありがと……（さっきまで死んだ魚の様な目だったのに急に態度が変わった……）」

しまった、露骨過ぎたか？　くっ、テンションの上げ下げがむずいぜよ。

「貴様……私の台詞を取るなよ。さっさと下がれ」

「お前ホントにさっきからおかしいぞ？」

善吉君とめだか君が俺を無理矢理後ろに下げる。畜生終わったよ、この野郎が。

～1時間後～

それから俺は、意気消沈な状態で依頼を聞く。
なんでも陸上部に所属している有明先輩のスパイクが悪戯でズタズタにされたとかで、犯人を突き止めて欲しいとかで、何だかんだで一時間が過ぎたのだが……。

「善吉君よ。あの子ってコ〇ンも真っ青の推理力だよな？」

「ありすぎて逆に引くぜ」

校舎の陰から陸上部の練習風景を覗きながらの俺と善吉君の会話。

「んで？　不知火さん、どれが諫早先輩？」

横目で直ぐ横に居る不知火さんに犯人であろう諫早先輩の姿を教えて貰う、正直また先輩だってんでテンションが上がり始めてるぜ。

「あの水道の所にいるのがそうだよ。三年九組諫早先輩、有明先輩と同じ短距離専門のアスリートで利き腕は左、同じスパイク履いているのはみてのとーり」

「ほう、俺と同じ左利きか、話が合う……とは思えないな」

気難しそうな目つきだしな。

「お住まいは２３地区で三年前から文車新聞を購読中――――だってさ！」

「……いつも思うのだが、不知火の情報ってどっから引っ張ってくんの？」

「あひゃひゃ！　人吉が正義側のキャラにいたいのなら知らない方がいいね」

様は人には言え無いような事ってか？

「ちなみにあの諫早先輩、有明先輩が代表に選ばれたせいでレギュラー落ちしてまーす」

「ふ～んて事は、だ」

「ああ、決まりだな」

上級生が下級生に出し抜かれたのが面白く無い故の犯行って所かね。やはりあの子の推理は正しかったって訳だな。

「意外とあっけなかったな」

「といっても、ほとんどめだか生徒会長の推理のお陰だがね……おおっ！　水を飲んでる姿がなんかセクシーだ！……ってオイ、二人とも何故俺から距離を取るんだよ」

「いや、なんかお前の言い方がヤラシー感じだったから」

「アタシも」

「フン、いずれ善吉君にも分かる時が来るさ。そして不知火さん、心配しなくとも俺は君に人間としては興味あるが、女性としては興味が１ナノも感じ無い！！」

言ってやったぜ馬鹿野郎が。

「……それはそれで傷付くかなーなんて」

「零。お前はもうちょっとオブラートに包んで言えないのか？」

「フッ、曖昧な供述をした所で意味なんて無いからな、ハッキリと言ってやった方がお互い良いのさ……」

「いや、そんな無駄に格好付けながら言う事じゃないぞ」

とまぁ、こんな感じでグダグダとやっていると、めだか君が後ろからやって来て、物的証拠も無い癖に諫早先輩に『貴様が犯人か？』とメジャーリーガーも真っ青な直球１８０キロストレートで聞き出す。
諫早先輩もいきなり核心を突かれたのか、返ってテンパりボロを出しまくった揚句に逃げ出すが、身体能力のスペックからして違うめだか君に直ぐに追い抜かれ結局捕まるのだが、めだか君も先輩を捕まえ様とはせずに何かを語った後その場を立ち去る。
その後、その場にヘナヘナと座り込む諫早先輩の所へ行って善吉君がめだか君について語り、いい感じで事件は解決の方向へと向かって行くのだった。
余談だが、善吉君の格好を諫早先輩がダサいと評した時は二人してマジでガッカリしたのは言うまでも無い。

～次の日～

「クッソー　どうしてこのカッコ良さが伝わらないのか……」

「全くだ……諫早先輩にはガッカリだよ畜生！！」

善吉君と二人して制服の中にジャージを着た格好をしながら鏡の前で唸る。

やっぱどっから見てもカッチョ良いと思うんだがなぁ。

「あの……人吉君と霧生君、ちょっと良いかな？」

「え？」

「あ、有明先輩！？」

いつの間にか有明先輩が後ろに居たのだが、なんか最近背後を取られる事が多いな。

「人吉君のその格好、個性的でカッコイイと思うよ？」

「な、なぬっ！！」

「あ、アリガトございます」

「ちょっ、ちょっと有明先輩俺は？　ねぇ俺は！？」

「あ、ああ、うん。格好良いんじゃないかな？」

「な、何で疑問形なんすか！？　せめて俺の目を見て言って下さいよ！！」

「うんカッコイイカッコイイよ」

あからさまに目を逸らしながらの発言に、俺の心はズッタズタさ……グスン。

「お、落ちつけって、な？」

「善吉君は良いよなぁ、先輩にカッコイイって言って貰えてさぁ……グスッ」

鬱だよ……死にたいぜ畜生。

「あ、ああ。そう言えばどうしました？　また何か変な事でも？」

俺の事など無かった事にしやがった。

「今度はロッカーから代用していたスパイクが無くなってて……」

「は？」

「代わりに新品のスパイクとこんな手紙が入ってたんだけど、どういう事だと思う？」

「これは――「何々『ごメん』か……」おい零、話に割り込んで来るなよ」

「うっせ、色男はだまってろ！」

（かなり引きずってるな……コイツ）

先輩にカッコイイって言われたんだ、会話に割り込む位でガタガタ抜かすなや。

「……有明先輩、見た限りですがこれからはあんな悪戯も無いと思いますので、もう大丈夫ですよ？　心配無いです」

「そ、そうかな」

「ええ……陸上、頑張って下さいや。応援しますよ」

うんうん、良い感じで解決出来たから自然と頬が緩むのが分かるぜ。

「あ……」

「へぇ？」

「なにさ？　善吉君に有明先輩」

俺の顔見て新発見でもした様な顔してコッチを見る善吉君と有明先輩。

何だよ、照れるじゃねぇか。

「あ～　俺が言うより有明先輩お願いします」

「うん、霧生君って笑うと結構カッコイイかも」

「えっ？　マジっすか！？　イヤッホーイ！！　褒められたぜー！！」

この喜びをどう表現しようか……そうだ！

「俺は鳥になるぜぇ！」

何か今なら飛べる気がするので、窓を豪快に空けて窓枠に足を乗せようとするが。

「ばっ、馬鹿！　ここ４階だぞ！？　飛び降りようとすんな！」

「うっせやい！　離せ、喜びの表現じゃあぁぁぁ！！」

「アハハ……」

後ろで苦笑いしている有明先輩の事などつゆ知らず、俺は喜びの余り窓から飛び降りようとするが、善吉君に後ろから羽交い締めにされて出来なかったのだった。

続く

8：「勝つぞ……！　絶対に勝つぜぇ！！」とか言った瞬間負け確定さ（後書き

主人公ってもしかしなくても真黒と相容れないかもしれない。

9：「ん？　間違ったかな？」（前書き）

主人公の淋しい放課後の過ごし方です。

９：「ん？　間違ったかな？」

スパイク事件の後始末も済み、帰ろうと校門を出る。

（ヤニィィィィ！！！！！）

俺は走っていた。

学校にいる間は、タバコを吸わない……と勝手に決めたのだがそんな俺の一大決心を無視するかの如く俺の身体は『ニコチン！　タバコ！　紫煙！　早く……早く摂取しやがれやぁぁ！！』と頭の中でリピートしまくってる。

（け、煙を吸わせろぉぉぉ！！！）

何時もなら学校から少し離れた所で胸ポケットに隠してるタバコを取り出すのだが、あのガキ女（タレ）……いや、めだか君がタバコを発見するや否や俺の目の前で真っ二つにしてくれたのだ。

当然俺は烈火の如くキレたのだが、学校で吸うなとか未成年をだしに正論で返してきたので何も言え無くただ黙認するしかなかった。

いくら精神年齢が二十歳過ぎてても、この世界での俺はまだ１６歳、本来ならパチンコにも行けない歳なので酒やタバコは以っての外なのだ。

まぁ、普通にそんなルールは破ってるのだが。

（つ、着いた……）

呼吸を整えながら、我が家であるボロアパートの階段を上がる。
なんだかんだでこのアパートに住み始めて二年が経過している、そして後三年……いや二年半位で俺がこのボロアパートに永住するか、死ぬかが決定するのだが、この世界に永住となった場合……あくまでも場合であって永住する気なんて更々ないのだが、もし永住決定となったらまた一から進路を考えなアカンのかと思うと異常に気が重い。

「ハッ……くだらねぇ」

馬鹿馬鹿しい何を考えてるんだ俺は違うだろ零。お前は帰るんだろ？　死んで家に帰るんだ。婆ちゃんがいない世界なんて……鬣の無い雄ライオンじゃねーか……チョイスが何かおかしい様な気がしたが気にしたら駄目だ。

「……よしっ！」

両頬をバシンと叩き気合いを注入しながら、部屋へと入る。

「帰ったぜぇ～……って誰もいないがね」

もう何回目になるか分からない淋しい光景。
まぁ、普通に考えれば孤独な独り暮らしの部屋に『ただいま』って言って『おかえり～』なんて返ってきたら、間違いなく空き巣か酔っ払いだけど。

「……先ずはニコチン摂取からっと」

学校を出た時から、ずっと頭の中でリピートしていたタバコを吸う、口に含んだ煙を肺に浸透させてから吐き出す……う～む、マイルド。我慢して我慢させられた後の一服の爽快感と開放感は最高だ、心が落ち着くぜ。

「さて、と所持金は……野口の兄さんが5人に福沢の兄さんが8人……先ずは夕飯の買い出しだな」

財布の中を確認してからバイクのキーを取り、上着を着る。
ちなみに口座の方には、おおよそ人様には胸を張って言えない様なやり方で得た金がうん百万単位であり、しかも元の世界に居た時から持ってた大型二輪と車……普通免許がこの世界に来た時も所持してたのだが、よくよく免許証を眺めてたら何故か今いるこのボロアパートの住所になっていたのは嬉しい誤算だった。要は、この世界で免許を取得出来る年齢になれば、わざわざ教習所に通わなくても車やらバイクに乗れるようになれる、という訳だからだ。
んで１６歳になった今。現在は原チャリと２５０ＣＣまでの二輪車が青の国家権力さんを気にせず、堂々と乗れるようになった。ちなみに大型二輪と車は１８……即ちこの世界へ永住する事になった瞬

間、解禁されるのだ。

「ガソリンは……あんまり無いな、帰りに入れとくかな」

ガソリンが高騰してる世の中の情勢に軽くイラッとしつつバイクのエンジンをいれる。
ちなみに俺が乗ってるバイクは、ローソンレプリカ仕様の“Ｚ１００Ｊ”カウル無し、通称“ジェイソン”だ。
今の年齢では乗ってはイケナイのだが、たまたまバイクを買う時に目に入ったのがこれだったので『まぁ、いいか』の精神で乗ってる。
サツにも捕まった事無いしね。

「さて、とエンジン音に違和感無し……行きますか」

軽い曇り空の中、ハンドルを握りアクセルを入れ、近所の大型スーパーに向かう俺だった。

☆★☆★

《リーチ！》

「おっ？　赤オーラ……激熱リーチってか？」

スーパーでの買い溜めも終了しいざ家に帰りましょう……という筈だったのだが、たまたま走ってた時にたまたまイベント開催中の旗があるパチ屋が目に入ってしまいフラフラと店に入って、何となく打ってみたのだが……。

《世紀末覇者拳〇！！》

「おおぃ！　いきなり文字赤ラ〇ウリーチかよ……これはもしかしたらもしかするぞ？」

座ってから打ち始めて、まだ二千円しか使ってないのだが、いきなりの激熱リーチに心躍る。

《ハァァ～》

「ああん！　ケンシ〇ウ対ラ〇ウリーチかい……どうせならト〇対ラ〇ウが良かったが……後は時の運だな」

《フォアタァー！！！》

《ヌオリァア！！！》

ケンシ〇ウとラ〇ウが正面からぶつかった瞬間上のロゴが揺れる…

…ヤバイ、来たんじゃねえか？　後は……。

「頼むぜぇ……しゃっ！！！」

画面の中の二人が空中戦を繰り広げた後地上に降り、振り返りながらお互い睨み合う画面……そしてボタンプッシュのマークが出たので『頼むぜ……お小遣！！』と思いながらボタンを押すと……。

《お前は……この時代に必要な男！》

（お……おおっ！　来た、来たぜ！！　プレミア縦カットイン！！）

本来なら、ケンシ〇ウが何か一言言うカットインが、プレミアであるレ〇のカットインになってる……という事は。

《フンッ！》

ラ〇ウの兜が割れ、そして。

《ラ〇ウ……！　そんな駄馬の上ではこの俺には勝てん！！》

当然ケンシ〇ウ勝ち、更に……。

「777リーチだったから何もせずともハイパーボーナスってね」

大当り……という訳だ。やっべ、周りのおっちゃんやおばちゃんやら兄ちゃんやら姉ちゃんやらがスゲェ羨ましそうに俺を見てくるぜ、ククッ此処は余裕の表情でタバコだね。

「フゥ……」

この後、夕方から入店して閉店ギリギリまで打ってた訳で、総額15万の臨時収入が入ったのだった。

★☆★☆

「すんませ～ん、LUCKY　STRIKEのBOXを4カートンください～い」

「かしこまりました～（あら、超イケメン……）」

「～♪」

いやぁ、今日は色々あって疲れたけどあのパチ屋での臨時収入のお陰でいくらか疲れが飛んだぜ。と、擬似的な疲労回復に酔いしれながら勝った金を必要な分を財布に入れて残りは口座に預けた後、タバコの買い溜めをする。

「ありがとうございました～」

「フンフフン♪　っと……夕飯買った材料が生物でなくて良かったわぁ～」

これが生物だったら、腐ってた事間違いなしだからねぇ、ホントに良かった。
後は家帰って飯食って寝る、大体これが俺の放課後の過ごし方だ。

続く

9：「ん？　間違ったかな？」（後書き）

次回は再び本編？　に戻ります。

１０：「いいか？　何度も言っては無いけど俺は年上好きなのだ！」（前書き）

主人公は結構我が儘なのかも知れない。

ってな訳でクオリティー最低ですが宜しければどうぞ！

10：「いいか？　何度も言っては無いけど俺は年上好きなのだ！」

どうでも良いのだが、何故あの学校はバイク通学が駄目なんだろうか。
恐らくは学校の品格とやらを著しく下げるとかってのが理由だと思うのだが、と何時に無くごちゃごちゃと言い訳がましく言ってるのかと言うと……。

「9時、遅刻決定か。痛つつ……しかも二日酔い」

おもっくそ寝坊&二日酔いで遅刻決定なのだ。
いや、遅刻だけならこんなごちゃごちゃと御託めいた事を考える必要は無いのだが、つい先日辺りにめだか君に勝手な約束を交わされたのだが、その内容が『遅刻及び授業のサボった場合は黒神めだかによる特別補習』だというお互いにとって全く利益の無いものだ。
中坊の頃からそうなのだが、何故かあのガキ女（タレ）……いや流石に可哀相だからあの子にしとくか、とにかくあの子は事あるごとに俺に突っ掛かってくるのだ、いわく『授業は楽しいぞ』だとか『そんな物を吸ってると早死にするぞ』等など、正直何回本気でブチのめしてやろうと思った事か……。

（また新しい目覚まし時計を買わないとな）

目の前で『ひでぶぅ！』となってる目覚まし時計に黙祷を捧げながらポリポリと頭をかく。

多分煩いとかいう理由で無意識に目覚まし時計の営業妨害という名の破壊をしてしまったんだろう。ありがとう……君の事は忘れないよ目覚まし時計君6号、と柄にも無い事を思いながら遅めの朝食と軽いシャワーを浴びて鉛の如く重い足どりで学校へと向かうのだった。

☆★☆★

「で？　学校に行く途中にお前好みの女性が居たからといって、ついフラフラと着いて行った……それが遅刻の原因か？」

「そうです、一目見た瞬間雷が走ったもんで」

学校に着いて早々担任から遅刻の原因を聞かれるというある意味お約束の展開を迎えてる訳だが、まさか二日酔いで寝坊しましたとは言え無いので適当にごまかす。
目の前でコメカミをひくつかせながら自身の理性を抑えてる教師と、その流れを呆然と見ているうん十人単位の餓鬼共もといクラスメイトがタルい二人のやり取りを眺める。

「もういい……早く座れ」

「うぃ～」

暫くジト目で俺を見てた教師だったのだが、やがて折れてお咎め無しで俺を席に着かせると授業を再開したのだった。
座った時に善吉君と不知火さんが軽く苦笑いしてたのは何故だか印象的だったぜ。

★☆★☆

席に着いて早々に睡眠学習モードへと移行した俺はいつの間にか放課後に突入、更にいつの間にか生徒会室へ召喚されてました。

「一組の担任から聞いたぞ。今日遅刻したそうだな？」

「……」

そして何故だが、正座をさせられてます。
目の前には生徒会長さんであるめだか君が居てその後ろで目安箱のチェック中の善吉君、そんな物（投書）より俺をフォローしておくれよ……。

「スマン。これにはエベレスト山より高く、マリアナ海溝より深い訳が……」

「ほぅ、言ってみろ」

口元に扇子を当てながら何処かの時代劇風な取り調べを受ける俺なのだが、ハッキリ言ってそんなデカイ例えにする程の理由なんて無い。
だって昨日は深酒をしてからの只の寝坊だもの。“響３０年”とかいう少々値が張りそうだが、なんとも美味そうな名の酒が５本限定で売ってたのをついつい買い占めてしまって案の定美味かったから、ついつい夜遅くまで飲んでしまっただけだもの。

「どうした？　言え無いのか？」

「……」

どうしよう、よくありそうな言い訳『両親が危篤だったんですぅ』は、両親がいないという事を知ってしまっているこの二人には通用しないし、かと言って正直に答えた所で動機が不純過ぎて普通に怒られてしまう。
最悪それが原因で『ガチ補習コース』直行だ。
それだけは何とか避けなければ……クソッ！　何で俺がこんな馬鹿らしい言い訳を考えなければ……これが年上でしかもお姉さん気質がバシバシの家庭教師だったら『色々と至らないと思いますが、何卒ご鞭撻の程宜しくお願いします！』と嬉し涙を流しながら言うと思うのだが、その補習教師が目の前居る、１万歩譲って同年代の餓鬼……そんなの、何が悲しくて一緒にお勉強をせなアカンのだ。

「ね、寝坊です」

結局言い訳らしい言い訳も浮かんで来なかったので、正直に言う事になった……ああ、もう嫌。

☆★★☆

それから約２・３０分程の時間を使い、めだか生徒会長様のありがたいお言葉という名のお説教を受け、説教だけで補習は無しになった。

このサプライズにはその場で小躍りする程喜んだ。

「そんなこんなで本日の投書は３件――――バスケ部部室の普請要請に学食の新メニュー開発そして、子犬探し、だ」

「子犬探し？」

（むっ！　来週の日曜日は設定Ａイベントか……）

ありがたいお説教も終わり、生徒会のお仕事モードへと移行した二人の後ろでパチンコ屋のイベントを携帯でチェックする俺。

仕事よりも趣味を優先するのが俺なのだ。

「ではバスケ部は私、学食の方は零、貴様が担当しろ……零？」

（フム、新台６０台導入か……こっちも捨て難いな）

新装開店は大体オールラウンドに出してくれるからな。
だが、少し遠めだな。

「おい、聞いてたのか！？」

「うおっ！　な、何！？」

耳元で呼ばれたので、一瞬心臓が止まるかと思いながら、何事かと声のした方向へと向くとめだか君が不機嫌そうな顔をしながらコチラを見ていた。

「ええっと、何か？」

話を聞いて無かった俺からして見れば、この状況は訳が分からない。

「……貴様は学食の件を担当だ、だ。聞いて無かったのか？」

「あ、ああ～ハイハイ分かりました。頑張ります、ハイ」

「聞いて無かった様だな……」

「みたいだな」

何やら俺の背後で二人分のため息が聞こえたのだが、うん、次から気をつけますかな。

「ところで、善吉君は何をするんだ？」

「やっぱり聞いて無かったろ？　これだよ」

「ハハ、面目ねぇ。どれどれ……善吉君一生のお願いだ、この学食の仕事と交換してくれ頼む、いやお願いします！！」

何気無く話を聞いて無かったのをカミングアウトしつつ、善吉君の

担当する投書の内容を見てもの凄く善吉君と仕事を代わって貰いたい衝動に駆られ、自分でも歴代１・２位にランクインする勢いのある土下座をかます。

「なっ！？　オイオイ、いきなりどうしたんだよ！？」

「頼むっ……！　俺は昔から犬が大好きなのだ！　頼むぅぅ！！」

超困り顔の善吉君を無視した土下座だが実際問題、犬好きだからって代わって欲しいのでない。
投書の差出人の名前と学年を見て代わって欲しくなったのだ。三年二組、秋月。かわいらしい犬のイラストに文字……間違いなく女子、更に年上、俺のやる気ボルテージは一気に上がったという訳だ。
正直学食の新メニューなんて善吉君にも出来る仕事だからな、変わって貰えればお互いハッピーだ。

「う～ん」

「どうだろうか？」

何やら考え込んでいる善吉君。
それに対して俺は『考えるな！　感じるままに俺と仕事を交換しろ！』と念じまくる。

「いや、ほらめだかちゃんが俺に指定して来た仕事だし本人に許可も取らずに仕事を代えるってのは……」

横目でめだか君をチラ見しながら言う善吉君、対してめだか君は目をつむり紅茶を飲んでる。

「フッ、なら本人に聞けば良いのだ……めだかちゃん！　別に代わっても良いよな？」

妙に絵になる姿で静かに紅茶を飲んでるめだか君に、確認を取る。暫くするとゆっくりとティーカップを受け皿に置き目を開ける。

「私は別に構わんのだが……」

よしっしゃあ！　言動取ったぁ！

「ほら見ろ聞いたか善吉君！！　後は君が首を縦に振れば……『だが！』――アァン！？」

会話に乱入して来た主であるめだか君を見ると、目をカッと見開いて俺を見ていた。
思わず喧嘩を売られた様な返事の仕方をしてしまったのは仕方が無いだろう。

「何だよ？　何かあんのか？」

「零よ……貴様、そこまでして代わって欲しいのなら、それなりの理由があるのだろうな？」

「は？」

「そうだぞ。お前、時たまおかしな事を言い出すからな」

善吉君とめだか君に理由を言えと迫られた。
まぁ、理由位は言っても良いかな？　別に邪な理由じゃ無い……筈だし。と思い正直に理由を述べると、段々とジト目に近い目つきになっていく二人、そして。

「分かった。代わって貰いたい理由は良く分かったよ……」

「おおっ！　なら」

希望の光が見える未来を想像しながら『オラ、ワクワクすっぞ！』の気持ちで次の言葉を待つ。

「善吉……」

「ああ」

（ワクワク）

「早く行け、子犬捜しにな……」

「了解」

「えっ！？」

「零、貴様は学食担当だ。私がやった人選振り分けに変更は無い。早く行け！」

「あ、あれ？　さっき『代わる事は別に構わない』……って」

「私もバスケ部の仕事を開始するかな……」

「おう、じゃあまた後でな」

「ねぇ、聞いてる？」

何処からか出して来た虫取り網を引っ提げながら生徒会室を出る善吉君とめだか君。
出てった事で独りになる俺。

「な……何故じゃあぁぁぁぁぁぁ！！！」

思わず頭を抱えて叫んでしまったのはしょうがないだろう。

☆★★☆

滞る事無く学食の件が終わったので、報告&帰宅の為に生徒会室へと向かいながらブツブツと独り言を言う。

「クソッ！　犬探しの方が良かった……」

腐った女みたいに未練タラタラな状態で歩く。
確かに学食の件の時に上級生が居たのだが、いかんせん全員餓鬼臭かったのだ。
ああ、でも食育委員会とか変わった名前の委員会と合同で学食新メ

ニューを考えた時に会った、米良（めら）　狐呑（このみ）さんとかいう人は少し違ったかな、軽くクール入ってたぽいし。
まぁ、俺がサンプルとして作った飯が気に入ら無かったのか、終始ガンつけられただけだったがね。

「フゥ、早く帰って酒でも飲みたいぜ……」

今日の俺は良いこと無しだし、そんな時はさっさと帰って寝るに限るな。

★☆☆★

「で？　犬畜生にズタボロにされた揚句に捕まえられず、のこのこと戻って来たのか？」

「……ハイ」

上から下までズタボロの善吉君に、鬼の首を取ったの如く罵言を浴びせる。
代わってくれ無かった恨みはデカイよ？

「……というわけでございまして、不知火と一緒にターゲットを発見するも捕獲には失敗。その後の逃走を許してしまいました」

めだか君に報告する善吉君の後ろ姿が寂し気に見えなくも無いが、俺は全く同情はしない。
俺に代われば犬ッコロの一匹や二匹、即座に捕獲してやったんだからな。

「そうか……まぁなんというかアレだな。取り敢えず貴様等の仲の良さは不愉快だな」

「ふわぁ～あ」

既に興味が失せた俺はソファーにねっころがりながら、二人のやり取りを右から左で聞き流す。

「要するに、行方しれずとなっていた約半年もの間に、子犬は成犬になってしまったというわけか？」

「あー……まぁ、そんなトコだ。いやそれどころか、ありゃあ完全に野性化しちまってるよ」

（今日の夕飯何にしようか。たまには外で食うのも悪く無いな……）

「一応投書主にも会ってみたんだけど『なぬっ！』……なんだよ零？」

夕飯の事を考えてながら何となく聞いていると、善吉君の発言に超反応する。

「お前……会ったのか？　秋月先輩に」

「ああ、そうだけど……」

「どんなだった？」

「は？」

「いやだから、どんな感じの女性（ヒト）だった？」

会ったんなら是非とも感想が聞きたい。
聞く位なら別に罪にはならんしね。

「あ～　それがいかにもって感じのお嬢さんでな？　とてもじゃねーが犬の事は言え無かったよ」

お嬢さん……か。

「あっそ、善吉君ご苦労」

何か急に冷めるものを感じながら、再びソファーに寝転ぶ。

「何だよお前、急に態度が変わったな」

「ああ、うん。まぁいいじゃん、ほら続き続き」

「あ、ああ」

報告を再開する善吉君。その後ろで急に冷めた感情になりながらソファーにダイブする。

お嬢様タイプは俺の趣味じゃ無いので、一気に興味が失せた。

つーか秋月って人は馬鹿なのか？　犬を学校に連れてくるのかよ普通。

このクソ広い学園で逸れたらそう簡単に見つからない事ぐらい考慮しろよ、第一何で犬の種類がウルフバウンドなんだよ。よく今まで人を襲わなかったな、犬の方がよっぽど利口じゃねーか。

「やはりこの件……私が動こう」

俺が秋月さんの事を考えていると、どうやらめだか君が動く事になったらしい。

なら俺はお役御免だよな、ってことで。

「んじゃあ、俺は帰っていいか？　学食の件は片付いたし～」

「む……まぁ、良いだろう。学食長からも完了の報告を受けたからな」

「そういう事だから俺は帰るぜ」

「ウム、では明日な……遅刻するなよ？」

「わかってるって」

一々念を押すな。遅刻しずらいだろうが。

「じゃあな零！」

「おう、善吉君も頑張れよ～」

軽く挨拶を交わし、俺は生徒室を出た。

★★☆☆

「たらら〜りらら〜♪っと」

少し早めに学校を出れるのか、少しご機嫌に近い気持ちで昇降口を出る。

「塩〜♪塩〜♪名前で良くあるのはよしお〜♪」

適当に考えた歌を歌いながら歩いてると、周りの餓鬼共にクスクス笑われた……が今の俺は気にしない。

「〜♪　ん？　ありゃあ」

裏口の門から帰ろうと歩いてると、何かが俺の目の前を歩いて行った。

「……何だありゃあ？」

身体中傷だらけで『俺に構う奴は食いちぎる』と言わんばかりの雰囲気全開の、おおよそ犬には見えない単なる獣だ。

「あれが善吉君達が探してた犬か？　ハードルたっけーなオイ」

あんな出で立ちの犬ッコロなら善吉君のあの傷は納得だわ。
ん？　目が合った、アレ？　唸ってるぞ？　そして何故低姿勢なんだよ……オイまさか。

『ギャオォォ！！』

「うわっ！」

いきなり俺に向かって飛び付いてきやがった。
咄嗟の事だったので、右腕を前に出したら見事に噛み付かれた。

『グルルルル！』

「イ〝デデデ！　何で俺に噛み付くんだよ、しかも犬なのに『ギャオォォ！』って……」

普通なら腕が食いちぎられる位の顎の強さなのだろうが、生憎俺の肉体は普通を通り越してるから血がドバドバ出る程度だ。

「オイオイ、犬に噛まれて死ぬ実験はもう体験済みだから、テメェに噛まれても嬉しかねぇぞ？」

『ビクッ！』

声色と顔つきと気配を変えて、右腕を食いちぎらんとする犬コロを睨むと、急に犬コロの様子が変わりだし、噛み付いて離さなかった右腕から離れる。

「フンッ！」

『キャインッ！！』

すかさず、調教目的のゲンコツを食らわせると、雷に怯える犬みたいな鳴き声と共に気絶してしまった。

「ハァ～　制服に穴が空きやがったな……あの秋月ってセンパイを脅して……いや、やめとこ傷は無くなったし」

既に傷が塞がった右腕を眺めながら、脅迫材料が消えた事を残念に思いつつ、気絶した犬を踏ん付けながら学園の門を出たのだった。ちなみに、その数分後に犬のコスプレをしたためだか君とその後ろに

着いていた善吉君と不知火さんが気絶した犬ッコロを見て大騒ぎしたのは次の日になって知った事だ。

続く

１０：「いいか？　何度も言っては無いけど俺は年上好きなのだ！」（後書き）

それではまた次回

１１：「反則王って呼ばれてる位だからてっきり鉄仮面と水平二連式ショットガ

前半と後半に分けます。

てな訳で前半です。

ちなみにこの主人公は変に正直と言いますか……チャラ男予備軍と言いますが……とにかくどうぞ。

あと後書きに質問的な奴を載せてみました。

１１：「反則王って呼ばれてる位だからてっきり鉄仮面と水平二連式ショットガ

昨日は疲れた……。
なんせ、めだか君に恨みがあるとか無いとか吐かしてたエセ不良君達を善吉君と一緒になって叩きのめしたのだ。
と言っても手を出したのは善吉君であって俺は一切手を出してない。だって、手を出したら向こうが死んじゃうし、それじゃあ『死ぬ』が行動理念の俺からしたら考えられませんからね。
なので、向こうがどっから引っ張ってきたのか知らない、釘バットやら鉄パイプやら模擬刀などの凶器（ドーグ）で俺に襲い掛かって来たのを真っ向から受けてやったら、顔を真っ青にした揚句気絶しやがったのだ、『自称グレてます』の癖してチキンな野郎だ。
まぁ、殴って蹴ってを繰り返して作った傷がまるで“元に戻るかの様に”修復していくのだから普通の人間の神経だったら気味が悪くてしょうがないだろうけど。
ちなみに俺の外から貰ったこの力、再臨（リセット）の力についてだが、善吉君とめだか君と他数名はある程度知ってる。……といっても、彼等の認識は“傷の治りが異常に早い”程度だがね。

ＥＰ：１１ｓｔａｒｔ

てな訳で昨日の事を思い出しながら、善吉君と並んで生徒会室へと向かってる。
お互い何気ない談笑って奴だ。

「しかし昨日の出来事クーデター（笑）は間違いだったって事にし

て、本人に言わん方が良いかもね」

「そうだな、これは俺達の胸の中にしまっとこう」

誰だったかのくだらないクーデター事件についての話だ。

「てか今更なんだけど君等ってさ、よく俺と一緒にいられるよな？」

「は？」

突然話の内容をすり替えたので、キョトンとした表情の善吉君。

「いや、さ。俺の身体ってさ、どんなに殴ろうが、蹴ろうが、刺そうが、斬ろうが、落とそうが、すり潰そうが、その場で出来た傷が瞬くまに修復するんだぜ？　君等から見ても気持ちの良いもんじゃ無くね？」

むしろその逆だ、近付きたくも無いと思うのが普通の人間の考えだ、と何時に無く弱ネガティブ思考になってると、善吉君は「んな事かよ」と言った後、続けた。

「まぁ、なんだかんだでお前の場合は“アイツ”と違って他の人間の害になって無いしな。お前、中学の時は単なる素行の悪い不良中学生で通ってたし」

「ふ～ん？」

確かにあの頃は、授業をサボる程度に留めて置いただけで、暴力沙汰は無かったなそういや。
それに、善吉君の言う“アイツ”というのは、恐らく球磨川君の事だろうね。
善吉君ったら彼の事を死ぬ程毛嫌い&怖がってたし、でも今はどうなんだろうか、会えばトラウマ再発かな？

「まっ！　そういう訳だから零。気にせずめだかちゃんを手伝ってやってくれや」

柄にも無く頭を下げる善吉君。
うん、まぁ……手伝うっちゃあ手伝うけど、俺の本当の目的を知った時はどんな反応をするんだろうね。

「ああ、可能な限り手伝わせて貰うよ」

「おぅ！」

まぁ、時期が来るまでは君等に従わせて貰うよ時期が来るまで、ね。

「！？」

およ？　考え事をしてたら善吉君がひっくり返ってらぁ。

「どうしたよ？　善吉君……ってああ、なるへそ」

「善吉、零。今日は柔道部に行くぞ」

下着姿のめだか君が柔道着を掲げながら言ってる。
相も変わらずの露出狂っぷりに感心するぜ。
う～ん、これが年上のお姉さんだったらと思うと悔やまれるぜ。

「鍵をかけろ！　カーテンを閉めろ！　人目をはばかれ！！　何遍いったらわかるんだ！！」

疾風の如き動きで扉、窓、カーテンを閉めてめだか君に怒鳴り散らす善吉君だが、その手のタイプの人間にゃあ無駄だろうぜ、と思いながら二人の不毛な争いをボケーッと眺めるのだった。

☆★★☆

「柔道部？」

「うむ、柔道部部長の鍋島三年生は知ってるな？　彼女から目安箱に投書があったのだ」

「鍋島って、特待生（チームトクタイ）の鍋島猫美さんか？　あの有名な柔道界の反則王と呼ばれたあの人？」

反則王？　誰だそりゃあ。
生憎、最近まで人付き合いもへったくれも無かったのでその鍋島とかいう人の事は知らない。
唯一分かるのは女性……しかも三年生って事か。

「フ～ム……興味あるな」

「ほぅ、貴様がそんな事を言うなんて珍しいな」

「まぁ、人間ですから興味位は持ちますぜ？」

「まぁ、何にしても行ってみようではないか。柔道部といえば懐かしい顔にも会えるだろうしな」

「あ、ああ……」

「懐かしい顔？」

「零。貴様も知ってる顔だ」

俺も知ってる？　う～ん……ますます分からない。
まぁ、行ってみれば分かる事か。

☆★★☆

「失礼します」

「おお、やっと来たか」

「……チッ」

「あからさまな舌打ちは止めろ」

つー訳で俺は柔道場……では無く職員室に居た。本来なら俺も一緒

に行こうとしたのだが、悪意のあるタイミングでの担任の呼び出しを喰らった、呼び出された内容は大体分かる為に苛々する。

「……今度からは気をつけろよ？」

「……ハイ」

「よし、この話は終わりだ。早く行け」

「失礼しました」

予想通り、似たり寄ったりな話題での説教を喰らった。
頭の中で何百回になるか分からない程、目の前でウダウダ吐かしてる教師を様々なシチュエーションでＳＡＴＳＵＧＡＩしていたので８割は話を聞いて無かったがね。

その後、得に何も無く柔道場に到着。
例によって剣道場と同じ位にデカイ道場なのは言うまでもなく、こんなもんに金を掛けるのが理解出来ない、俺なら売り飛ばして直ぐ金にするね。まぁ、所詮人によって価値観は違うのだから、只の道場に無駄に金を掛けまくる人からしたらそれはそれは素晴らしいのだろう。

☆★★☆

「すんませ～ん、遅れますぃ～た……って、うわ～お、モウレツゥ」

柔道場の中はまぁ～凄かったわ。
いやだって数名以外の人間がお昼寝タイムなんですもの。

「むっ……零か。遅かったな」

「ゴメンよ、思いの他長引いたんでね」

「フン、普段から真面目に授業に出てればそんな事にはならなかったんだ。自業自得だな」

「返す言葉もございません」

「まぁ、良い。後少しで鑑定も終わるからお前もあそこに居る善吉と一緒に待ってろ」

「ほい～」

めだか君が後ろ指を差した先に居る善吉君の元に行くと、他二人の柔道部員がいる。
つーかその内の一人って……そういう事かいな。

「よぉ零、遅かったな」

「君は……」

「ほぉ？」

何時もの様に挨拶する善吉君にちょっぴり顔が青い様な様子の金髪ロングイケメンに、誰だか分からない人。

「ん、先公の話が嫌に長くてね……っと、久しぶりですね阿久根センパイ？」

「……」

善吉君に理由を説明しつつ、金髪ロングイケメンもとい阿久根君に挨拶をするが、あからさまに警戒してますな顔で俺を見てくる。

「へぇ？　めだかちゃんが俺も知ってる顔ってんだから誰かと思いきや……いやはや、まさかの阿久根センパイだったとはねぇ……意外だわ」

普通に言ったつもりなんだが、阿久根君は気に入ら無かったのか睨みが強くなっていく。

「意外？　どういう意味だ……」

「んだよ……そんな睨まなくても良いんじゃありませんか。俺が言いたいのは、中坊の頃の貴方から考えてたら今の状況が信じられないって意味ですよ」

まぁ、それもこれも俺が勝手に阿久根君に期待しただけなんだが。

「……」

警戒と軽い恐怖が交じった睨み方で俺を見る阿久根君。
その空気がキツイのか流石に善吉君と……誰かさん、得に善吉君がオロオロしだす。

「お、オイ二人共。落ち着けって、な？」

「俺は至って平常心だぜ？　善吉君。だけど向こうが敵意バンバンだからねぇ？」

「……っ！」

ニヤケ顔の俺が気に入ら無かったのかより一層睨みを効かすが、殺気を出すならもうちょい真面目にやって欲しいもんだね、これならヤー公の睨みの方がまだ怖いしな。

「まぁまぁ、阿久根君に……霧生君っていうたかな？　何があったか知らんケド思い出話もそこまでにしときや」

「あ？」

横からいきなり話に割り込んで来たもんだから、例によってまた喧嘩腰の口調が出てしまった。
この癖早く治さないとマズイな。

「そんな睨まんといてーな……」

「ごめんなさい。これ半分癖になっちゃっててて……」

「本当だぜ、早く直せよな？」

「わ～とるわい」

「グホッ！」

後頭部に両手を組ながら軽口を叩く善吉君に軽くイラッとしたので、空いていた脇腹に軽い肘打ちをすると良い感じで入ったのか、その場で悶絶する。

「ったく、一々リアクションが大袈裟なんだよ……っとんな事より自己紹介を、生徒会“役員補佐”の霧生零です」

悶絶する善吉君をほっといて、名も知らぬ女性に自己紹介をする。相変わらず阿久根君は睨んでくるが、これから先もう君に用は無いから何もしないんだがなぁ。

「こらご丁寧にどうも。鍋島猫美です、どーぞよろしゅう」

握手をしつつ名前を告げられた、がその名前を聞いた瞬間思わず鍋島さんの顔を見る。

「？　なにか？」

珍しい物を見る様な目をしたのが気になったのか、聞いて来る鍋島さん。つーか、え？　この人が善吉君の言ってた反則王さん？

「いや、善吉君から反則王さんの話を聞いたから、どんな人なんかなぁって思ってたら、まさか貴女が……」

「それはどういう意味や？」

「う～ん、俺の勝手な想像ですが『俺の名前を言ってみろ』とか『兄より優れた弟など存在しねぇ！！』や『馬鹿め勝てばいいんだ！！』とかいう鉄仮面被りの人みたいな外見を想像してたもんで」

「そ、そうなんや」

反則の“王”ってんだから、そもそも男だと思ってたしね。

「それがこんな美人さんだとは……うん、来て良かったです」

「は！？」

「お、お前何言ってんだよ！？」

「まさか君がそんな事を言うとは……意外だ」

俺の言葉にビックリした様子の鍋島さんと善吉君。阿久根君は冷静に俺が言った事が意外だったらしい。
つーか鍋島さん普通に美人じゃん、事実を言って何が悪いんだよ。

「意外って阿久根センパイ……貴方は俺がホモか何かに見えたんですか？」

「い、いや。そういうつもりじゃ……」

「それと善吉君。美人さんに美人と言って何が悪い？　俺は美人には美人、ブスにはブスとハッキリ言うぞ？」

「あ、あのなぁ……」

俺が言った事に、呆れ顔の様子で返す善吉君。
今に始まった事じゃないが、コイツ等って美人を見ても案外平気な

顔して会話するよね。
俺なら迷わずナンパに走るってのにさ。
といっても今回はナンパじゃ無くて純粋にそう思っただけだがね。

「いやぁ、こんなイケメンに言われるなんて、何か照れるわぁ」

うっすらと顔を赤くしつつ照れる鍋島さん。
う～む、やはり美人だ。

「アハハ！　ありがとうございます。ってそうだ、後でメルアド交換……ギャン！！」

連絡先の交換を持ち掛け様としたら横から結構な衝撃を喰らった。
衝撃の正体は名も知らない柔道部員で、どうやらめだか君がこちらに投げ付けて来たらしい。
鍋島さんと善吉君と阿久根君がそろってビックリ顔だもん。

「イッテテ……オイめだかちゃん！　何すん……だ？」

途中で言葉が詰まったのは仕方が無い、何故だから知らないがめだか君がすんごい氷点下の目で俺を見据えてやがるのだ。

「あ、あのぉ？　黒神生徒会長、一体いかがされました？」

場合にもよるが、こういった眼力の持ち主から睨まれるのは、肉体の暴力より怖い時があるのだ。だからついつい下手に出てしまうのは仕方が無い事なのだ。

「貴様……私は善吉達と談笑しながら一緒に待ってろとは言った。しかし、誰がナンパしろと言った？」

「あ～　いやだって美人さんがいたら声を掛ける事位は常識……いや申し訳ございません、だからその柔道部員さんをコチラに投げ付けるのは勘弁して頂けないでしょうか？」

いつの間にか発射体制に入ってた柔道部員さんを見て、瞬時に謝罪をする。
こんなアホみたいな事で死ぬのはどーせ無理だし、だったらせめて投げ付けるのは男子部員じゃ無くて女子部員……あっ、また男子部員が飛んで……。

「あべしっ！」

上手い具合にお互いの頭がヒットして、余りの痛さにその場で悶絶する。

「ひ、人は余程の事が無い限り、真っ直ぐ飛ばない筈なのに」

「フン」

俺の疑問も『そんなもん知らん』という顔をされてバッサリと切り捨てられた。

「零、今のはお前が悪いと思うぞ？　あの柔道部員には悪いが」

「オレもこの虫の言う事に同意する、君が悪い。……しかし、相変わらずめだかさんは勇ましい！」

「あ、アハハハ～」

どうやら善吉君と阿久根君は俺の味方では無いようだ……覚えてやがれ。そして鍋島さんは苦笑いした顔も美人だった。

「さて、鍋島三年。阿久根二年以外鑑定は終わった、後は先程も言った通り善吉と阿久根二年の試合で最後だ」

「し、試合？」

「ああ、そういえば貴様には言って無かったな。阿久根二年は善吉と試合をする形で鑑定するのだ」

「あ、ああそうでっか……」

つーかこの状況を誰も心配してくれないのですか……おじさん悲しいよ？

「霧生君……大丈夫かいな？」

と思ったら鍋島さんが普通に心配してくれた。

何だろう、目から汁が出て来た。

「グスッ……貴女だけです、俺に優しい言葉を掛けてくれるのは、やべぇ惚れそうになりました」

「……ま、まぁ、黒神ちゃんが怒るのも分かる気がするわ、ナンパはアカンでナンパは」

「いや、別にナンパなつもりは無いのですが……一応以後気をつけます」

そもそも美人な女の人に話掛けただけでナンパ扱いしやがるめだか君の認識が異常なだけであって、普通の人間からしたらあんなのは挨拶みたいなもんだ。

それと何故か『惚れそう』の件をスルーする鍋島さんがチョイと気になるが、取り敢えず頭の隅の方に置いといて、善吉君と阿久根君の試合を見学するのだった。

続く

１１：「反則王って呼ばれてる位だからてっきり鉄仮面と水平二連式ショットガ

恋愛描写って入れる方が良いのか？　それとも入れないべき？

このお粗末話を読んで頂いている皆様はどう思いますかね？

１２：「おいテメェ！　そのうるせぇ笛吹くの止めないと鼻に一発痛いの食らわ

後半ですが、タイトルに意味も何もありません。

つーかもはや原作沿いでは無くて単なる主人公の長考タイムになっていて、その上主人公のチャラ男予備軍全開モードの回だったり…。

まぁ、読んで後悔しないという鋼の精神力を持つ方はお読み下さい。

それと、いつの間にか評価が３４０位になってました。
いやホントに恐縮です。これをバネにしたいと思います。

それと、感想をくれたアキスマンさん超ありがとうございます。

12：「おいテメェ！　そのうるせぇ笛吹くの止めないと鼻に一発痛いの食らわ

ちゅう訳で、俺は善吉君と阿久根君の試合とやらを見学をしている訳ですがハッキリ言おう……退屈だ。
めだか君と鍋島さんは善吉君と阿久根にお熱（試合の様子を見ている意味で）で他の柔道部員も同様だ。
その中で欠伸するのを我慢しながらボケーッと見ている俺は完全にアウェー感全開って訳だ。
あっ……阿久根君の巴投げが綺麗に決まってらぁ。

「退屈そうだな零」

「んあ？」

阿久根君の一本背負いが決まり、投げられて早四回目の善吉君を身体にフワフワした感覚を覚えつつ見ていたら、不意にめだか君から話し掛けられる。

「まぁ、柔道のルールを知らないので何がアレなのかがサッパリとわからなくてね……」

「フム、なら私が実践を交えながら教えてやろうか？」

「結構だ。只単に自分を痛めつける趣味は無いんでね」

「そうか……」

めだか君の提案を断ると、そのまま視線を戻す。先に言って置くが、俺は死ぬのが目的であって、自身を痛めつけるマゾピストの気は無いと胸を張って断言する。
第一あの程度では死ねない、たかだかスポーツの柔道なんかに興味は無い。
いや、柔道をこよなく愛する人達に失礼だから『なんか』呼ばわり事は訂正しよう。
話が変わるが、さっきから何か隣に居るめだか君と鍋島さんが天才だかどうとかごちゃごちゃと言ってる気がする。
盗み聞きするつもりは無かったのだが、どうやら鍋島さんは天才がお嫌いらしく、対してめだか君は「天才等いない」と言い張ってる。
俺は思う……めだか君よ自分の姿を鏡でみたまえねって。
正直、努力だけではどうにもならん事が世の中にはごまんとあるし、この目の前で何やら語ってるがきんちょは人間の持つ得意分野を集約した様な存在だからな。
これは俺の勝手な目測なんだが、めだか君近い将来、限り無く“俺に近い存在”になりえるかもしれない。
と言うのも“人から聞いたり見たりした事を自分なりに吸収し更に上げる”は俺の中にある力と似ている節があるのだ。
さしずめ、俺が無限吸収（ブラックホール）だとするなら彼女は完全（コンプリート）ってところか。
まぁ、俺の力の様に“特技を吸収された人間が永久にその特技を発揮出来なくなる”とまではいかないと思うがな。

「お……ぜ……ろ……？」

まぁ、めだか君がいい感じで成長してくれた時は俺の力を覚えさせて、その後に俺の中から力を奪い取ってくれればハッピーエンドなんですがねぇ？　上手く行けば良いのだが……。

「おい零！？」

「はっ？」

考え込んでいた俺を揺さぶる様にして現実に戻してくれためだか君が目の前にどアップで見えた。

「ええっと……何か？」

「何か？　じゃ無いだろう。阿久根二年生と善吉の試合は終わった帰るぞと、さっきから言ってたのに貴様……聞いて無かったのか？」

「あ、ああ。悪い、考え事をしていて聞いて無かった」

深く考え事をすると周りが見え無くなるってのはどうやら本当の様だな。聞くところによると、善吉君が最後にナントカ刈りだったかで阿久根君から一本取り善吉君の勝利らしいってな話を半ば右から

左へと受け流しながら聞いた。
まぁ、これで視察が終了したって事なので……。
「てな訳で鍋島先輩……早速メルアドの交換を……っ！」
「あれ本気やったんや？」
「な～にを言ってるんですか、俺は冗談で連絡先の交換を持ち出す程暇な人間じゃないッスよ」
そんなこんなで、人から聞いた連絡先の数はもう二百件近くになる。
まぁどれもこれも連絡先の交換止まりな訳ですが……。
「ナハハハ！　全く、霧生君にはある意味じゃ敵わへんなぁ。ええやろう、今から着替えて来るからちょっと待っててな～」
「マジっすか！？　イヤッホーイ！　いつまでも待ってます！！」
俺は正に今“飛び上がる程喜んでいる”を素でやってる、周りの奴らの生暖かい視線なんてこの喜びに比べればミジンコみたいなもんさ。
「あ、阿久根先輩……俺達って」

「言うな……俺だって思ってたんだから」

「……」

後ろにいる善吉君と阿久根君からブルーな空気を、そしてめだか君からは何とも言えない視線を浴びせられてる気がするがもはや知らんの領域に入った俺には効かないわ！

続く

◆おまけ◇

零

「送信っと……来ました？」

鍋島

「うんうん、来たでぇ」

零

「暇な時は何時でもメールなり電話下さい。超喜んで受けますので」

鍋島

「そこまで言って貰えると普通にうれしいわぁ～」

零

「フフン、俺は年上の女性（と言っても肉体年齢的ですが……）には一定以上の敬意を払ってるつもりですから……っとそれは置いといて、これからお帰りですか？」

鍋島

「そうやけど……何かあるん？」

零

「ん～　もし良かったらこれから一緒に飯食いがてらの下校でもと……どうです？　門限とかあります？」

鍋島

「ん～ん、ないよ。なんや？　いきなりデートのお誘いかいな」

零

「そう取ってくれて構い……いやそうです」

鍋島

「おおぅ、君って結構ドキリとする事を平気で口走るタイプやねぇ」

零
「『女性を誘う時はまごついて喋らずハッキリ言え』……そう教えられましたからねぇ」

鍋島
「そうなんや。まぁウチは構わないんやけど……」

零
「？　何か？」

鍋島
「いや、後ろ後ろ」

零
「は？　後ろ？」

一体何が……と思いながら後ろを振り向くと。

めだか
「……」

妙に変な空気を醸し出しながら零を見据えるめだかがいたりした。
がこの男、自身の好みから外れてる女子には一定以下の興味しか持

たないので……。

零
「何だどうしたよ？　早く帰れば？」

寧ろ邪魔だとあからさまに態度を表に出しながら言う零。
そして更にその後ろで、三人のやり取りを半ば忘れられてる節がありながらもオロオロしながら見ている善吉と阿久根の二人。

零
「あ？　何だよ、さっきからずっと黙ってて……鍋島先輩分かります？」

鍋島
「さ、さぁ？」

零
「まぁ、この子が分からなくなるなんて何時もの話だから……っとくだらねぇ話は置いといて行きます……「オイ」――はぁ、何だよ？」

軽くうんざりした口調でめだかの方へと振り返る。

めだか
「悪いが貴様にはこれから私の書類整理の仕事の手伝いをして貰うからな……今日は遅くまで学校に残って貰うぞ？」

零
「はぁっ！？　嫌だよ、何で俺がやるんだよ。善吉君にでも手伝わせりゃいいじゃんよ」

めだか
「今日の善吉は阿久根二年生との試合のダメージがあって無理だ。それに比べて貴様はダメージ処か今日に至っては仕事すらして無いからな、調度良いだろ？」

零
「ぐっ……。確かにそうだが、だが何も今からじゃ無くたって……」

めだか
「もう決定事項だ。ほら、行くぞ！！」

零
「グェッ！　制服の襟を引っ張るな！　嫌だ！　俺はこれから楽しい楽しい下校ＴＩＭＥなんだよ！！」

めだか

「決定事項だから仕方が無い。それに、そんなに鍋島三年生と下校したいのなら、代わりにこの私が一緒に下校してやらん事も無いぞ？」

零
「ふ、ふざけんなっ！　何が悲しくてテメェみたいなガキ女（タレ）と一緒に帰らなアカンのじゃい！　それにお前は歩きじゃねぇだろうが！！」

めだか
「知らんな、そんな事は」

零
「ぜ、善吉君、阿久根先輩、鍋島先輩！！　誰でも良いからこの暴（タイ）君（ラント）を止めてくれ……って何で一斉に目を逸らすんだぁぁぁぁ！？」

一同
「（ご愁傷様です）」

ちなみに、零の学校滞在時間が過去最大を記録したのはいうまでも無い。

終了

１２：「おいテメェ！　そのうるせぇ笛吹くの止めないと鼻に一発痛いの食らわ

フラグでは無い……筈だ！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9469w/

死にたい不死身君

2011年10月9日21時14分発行